

得票の地域偏重よりみた選挙区特性

水 崎 節 文

岐阜大学教養部政治学研究室
(1982年10月12日受理)

Some Features of Election Districts with Reference to the Regional Difference in Votes obtained

Tokifumi MIZUSAKI

は じ め に

筆者は、昨年の小論で、衆議院総選挙における候補者個人の得票の地域（市町村）偏重の度合を数値的に表現する手段として、RS指数（相対得票率偏差または得票偏重化指数）を提案した⁽¹⁾。それは次の計算式による。

$$RS = \frac{\sum_{j=1}^m q_j |P_{ij} - \bar{P}_i|}{2\bar{P}_i}$$

m : 当該選挙区内の市町村数

q_j : 市町村jにおける有効投票数の選挙区内構成比

P_{ij} : 市町村jにおける候補者iの得票率

\bar{P}_i : 候補者iの選挙区得票率 ($= \sum_{j=1}^m q_j \cdot P_{ij}$)

このRS指数は、特定の候補者の市町村ごとの得票率偏差の加重平均（いわゆる平均偏差）を算出した上で、それをさらにその候補者の選挙区得票率で割って相対化したために、得票率に差のある候補者の間で得票の地域偏重度を相互に比較することが可能となった。また、このRS指数からは得票率の影響が消去されているので⁽²⁾、得票率とRS指数との間で相関・回帰分析を行なうことも可能となり、特定候補者、特に長期にわたる連続立候補者については、経年的な集票動向を把握することができた⁽³⁾。

ところが、この分析を進めているうちに、当然のことではあるが、特定候補者のRS指数は、同一選挙区内の他の候補者の地域的集票の動向に左右されるという事例に多く行き当たった。それは特に地盤を共有して競合している候補者の間で著しい。そこで、地域的集票動向を候補者固有の特性として個別的にとらえるRS分析に加えて、得票の地域的偏重性を選挙区全体の特性としてトータルに把握する手法の開発に迫られてきた。そこで、本稿では、筆者がこれまでに考案してきたその手法を手順を追って紹介し、それを若干の事例に適用した分析結果を提示してみたい。

I 選挙区偏重性の計量的把握の方法

得票の候補者への偏重度は、選挙区全体の集計でみると、各市町村ごとにみた得票の偏重度よりも一般的には緩和されてあらわれる。

表1 選挙区集計表サンプル

| 候補者 市町村 | A (得票率) | B (得票率) | C (得票率) | 有効投票数 | 同構成比 |
|------------|------------|------------|------------|-------|------|
| 1 市 | 245 (0.70) | 35 (0.10) | 70 (0.20) | 350 | 0.35 |
| 2 市 | 180 (0.60) | 75 (0.25) | 45 (0.15) | 300 | 0.30 |
| 3 町 | 20 (0.10) | 140 (0.70) | 40 (0.20) | 200 | 0.20 |
| 4 町 | 5 (0.05) | 70 (0.70) | 25 (0.25) | 100 | 0.10 |
| 5 村 | 10 (0.20) | 30 (0.60) | 10 (0.20) | 50 | 0.05 |
| 計 | 460 (0.46) | 350 (0.35) | 190 (0.19) | 1,000 | 1.00 |

この表は、以前にRS指数の計算例に用いたものであるが、RS指数との対比の便宜上ここに再び使用することにした。

例えば、想定上の選挙区集計表である表1によれば、1～5の各市町村では、第1位の候補者には得票の60～70%が集中しているけれども、選挙区計ではそれは46%に過ぎない。したがって、各市町村ごとにはかなりはげしくあらわれる得票の偏重は、選挙区全体としての得票の偏重からどの程度かけ離れているのかを数値的にとらえることが、上記の選挙区特性を把握する上で重要なことのように思われる。筆者は、それを次の手順で試みた。

(1) 地域単位得票偏重度の測定——レイ破片化指数の応用——

政党システムの計量分析において、エール大学のレイ (Douglas W. Rae) は、政党の選挙における得票数またはその結果としての議席数が、諸政党間でどの程度拡散しているかを示すのに、独特の破片化指数 (the fractionalization index) と称する測定式を提案した⁽⁴⁾。今それを政党得票の拡散度 (破片化) を示すためにFv (fractionalization of votes) であらわすとすれば、次のような式となる。

$$Fv = 1 - \sum_{i=1}^n P_i^2 \quad [n: \text{政党数} \quad P_i: \text{政党} i \text{ の得票率}]$$

この式のなかで、 $\sum_{i=1}^n P_i^2$ は、有効票を投じたすべての選挙人から2人を無作為に抽出した場合、この2人が同一政党に投票している確率の近似値をあらわしている。例えば、全有効投票数をX、政党iに投じた選挙人数を x_i とすれば、全有効投票者から2人を抽出する場合の数(組合せ)は、 ${}_xC_2 = \frac{1}{2}X(X-1)$ 通りであり、抽出された2人が同一政党に投票している場合の数は、 $\sum_{i=1}^n {}_{x_i}C_2 = \frac{1}{2}\sum_{i=1}^n x_i(x_i-1)$ 通りであるから、よって2人が同一政党に投票している確率は、後式を前式で割って $\frac{\sum_{i=1}^n x_i(x_i-1)}{X(X-1)}$ となる。ここでX、 x_i がそれ程小さな数でなければ、 $X-1 \div X$ 、 $x_i-1 \div x_i$ と考えて、この確率は $\frac{\sum_{i=1}^n x_i^2}{X^2} = \sum_{i=1}^n P_i^2$ という近似値であらわされることになる。Fvの式は、この確率を1から引いたものであるから、抽出された2人

の選挙人が逆に異政党内に投票している確率の近似値をあらわしている。

このように2人が異政党内に投票した確率をとらえることによって、レイは、政党間での得票の拡散度を数値的に表現したのである。この計算式は、政党の得票数だけでなく、政党の議席の拡散度を測定するのにも適用され(政党制破片化指数 $=F_p$)、議会における政党の破片化(政党数の増加および議席占有率の接近)が政府の安定性にどのように関わっているのかを、計量的に検証していく途を開いていくこととなった⁽⁵⁾。

レイの計算式において確率論的把握の基礎となっている $\sum_{i=1}^n P_i^2$ は、衆議院選挙区における得票の偏重度をとらえる上でも、重要な手がかりとなる。ここで、政党*i*の得票率 P_i を候補者*i*の得票率に、政党数*n*を選挙区内の候補者数におきかえると、 $\sum_{i=1}^n P_i^2$ は、集計単位区域内での得票の候補者への偏重度を示すこととなり、それは各市町村を単位としても、選挙区全体を単位としても算出することができる。表1の集計表にかんしていえば、この値からみた得票偏重度がもっとも高いのは、4町の0.555、次いで1市と3町の0.54、以下2市の0.445、5村の0.44の順となり、これらの市町村の偏重度に比して、選挙区全体では、0.3702と偏重度はかなり緩和されていることがわかる(表2参照)。これらの指数を、破片化指数に対して地域偏重化指数と呼び、これを市町村*j*について算出したものを dv_j 、選挙区全体について算出したものを Dv であらわすことにする(defractionalization of votes)。 dv_j 、 Dv は次の式になる。

$$dv_j = \sum_{i=1}^n P_{ij}^2 \quad \cdots \cdots \textcircled{1}$$

$$Dv = \sum_{i=1}^n \bar{P}_i^2 \quad \cdots \cdots \textcircled{2}$$

(2) 市町村偏重化指数の平均値

次に、各市町村の地域偏重化指数が全体としてどの程度のものであるかをみるために、その平均値を算出することを考えてみる。かりに、全市町村の有効投票数がすべて等しいならば、単純に市町村ごとの指数の平均値をとることが可能であるが、実際にはそのようなことはありえないから、各市町村ごとの指数に有効投票数の重みをつけた平均値(加重平均)を算出しなければならない。この平均値を \bar{dv} とすれば、

$$\bar{dv} = \sum_{j=1}^m q_j \cdot dv_j \quad \cdots \cdots \textcircled{3}$$

となる。表1の選挙区についてこれを試みると、表2に計算過程を示したように、 $\bar{dv}=0.508$

表2 市町村偏重度の平均値の計算例

| | 有効投票数構成比 (q_j) | 地域偏重化指数 (dv_j) | $q_j \times dv_j$ |
|------|-----------------------|-----------------------|-----------------------------------|
| 1 市 | 0.35 | 0.54 | 0.189 |
| 2 市 | 0.30 | 0.445 | 0.1335 |
| 3 町 | 0.20 | 0.54 | 0.108 |
| 4 町 | 0.10 | 0.555 | 0.0555 |
| 5 村 | 0.05 | 0.44 | 0.022 |
| 選挙区計 | 1.00 | 0.3702 | 加重平均(上記計) 0.508(= \bar{dv}) |

となる。すなわち、この選挙区では、各市町村の地域偏重度を平均した数値は0.508ということになる。

このような平均値を算出する方法は、破片化指数についてではあるが、ケンタッキー大学のグロス(Donald A. Gross)が最近の論文「分析単位とレイ破片化指数⁽⁶⁾」(Units of Analysis and Rae's Fractionalization Index, 1982)で試みている。グロスは、選挙区ごとの政党得票の破片化指数(fe)に各選挙区の有効投票数の重みをつけることによって、全国レベルでの平均値(the mean fractionalization index)を算出した。彼は、この平均値(\bar{fe})が全選挙区を合計した政党得票の破片化指数(Fe)よりも小さいことに着目し、その差を、1824年から1978年までのアメリカ連邦議会下院選挙について算出して、こうしたギャップが時期によって大きく変動していることを示したのである。

このことは、衆議院選挙区において、市町村の平均的な得票偏重度が選挙区全体の偏重度からどの程度離れているかを、数値的にとらえる上で大きな手がかりとなる。

(3) 市町村と選挙区との偏重度の差

上にのべた方法で各市町村の偏重化指数の平均値(\bar{dv})を算出すれば、それは、破片化指数の場合とは逆に、選挙区全体の偏重化指数(Dv)よりも大きな値となる。したがって、その差 $\bar{dv}-Dv$ の値は、市町村の平均的な得票偏重度が選挙区全体の偏重度から逸脱している程度を示しているといえる。表1・表2の事例にそくしていえば、この選挙区の地域偏重化指数は0.3702であるが、市町村の指数の平均値は0.508であるから、その差0.1378は、候補者の地盤の偏りによって生じた偏差だということができる。

ところが、興味あることには、この偏差 $\bar{dv}-Dv$ の値は、各候補者ごとに計算した市町村得票率のバラツキを示す分散(variance)の総和に等しい。候補者*i*の得票率の分散 V_{pi} は、候補者*i*の各市町村の得票率(P_{ij})と選挙区得票率(\bar{P}_i)との差を2乗し、それに有効投票数の重みをかけた平均値であらわされる。

$$V_{pi} = \sum_{j=1}^m q_j (P_{ij} - \bar{P}_i)^2 \quad \dots\dots ④$$

したがって、この分散をすべての候補者について合計すると、

$$\sum_{i=1}^n V_{pi} = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^m q_j (P_{ij} - \bar{P}_i)^2 \quad \dots\dots ⑤$$

となる。

この各候補者の得票率分散の合計値が上記の偏差 $\bar{dv}-Dv$ に等しいことは、やはりグロスが破片化指数について同様な論証を行なっていることから示唆を受けたものである。彼は、前掲の論文において、全国的に集計した政党得票の破片化(Fe)は、各選挙区ごとの政党得票の破片化の加重平均(\bar{fe})と、各政党の選挙区得票率の分散の総和 $\sum_{i=1}^n V_{pi}$ との和に等しいことを、数理的に証明している⁽⁷⁾。

$$Fe = \bar{fe} + \sum_{i=1}^n V_{pi} \quad \dots\dots ⑥$$

ここで、破片化指数Fe、 \bar{fe} にかえて衆議院選挙区における地域偏重化指数 Dv 、 \bar{dv} を用いて、 $Fe = 1 - Dv$ 、 $\bar{fe} = 1 - \bar{dv}$ とおきかえると、⑥式は

$$\sum_{i=1}^n V_{pi} = \bar{dv} - Dv \quad \dots\dots ⑦$$

となる。この⑦の等式が成り立つことは、数理的には次のように証明することができる。

①式を③式に代入して

$$\bar{d}v = \sum_{j=1}^m q_j \cdot dv_j = \sum_{j=1}^m q_j \left(\sum_{i=1}^n P_{ij}^2 \right) = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^m q_j \cdot P_{ij}^2 \quad \dots\dots\dots ⑧$$

②式の選挙区得票率 \bar{P}_i を市町村得票率 P_{ij} の加重平均と考えて書きかえると、

$$Dv = \sum_{i=1}^n \bar{P}_i^2 = \sum_{i=1}^n \left(\sum_{j=1}^m q_j \cdot P_{ij} \right)^2 \quad \dots\dots\dots ⑨$$

候補者 i の得票率分散は、④式を変形して、

$$Vp_i = \sum_{j=1}^m q_j (P_{ij} - \bar{P}_i)^2 = \sum_{j=1}^m q_j \cdot P_{ij}^2 - \left(\sum_{j=1}^m q_j \cdot P_{ij} \right)^2 \quad \dots\dots\dots ⑩$$

したがって、各候補者の分散の総和を示す⑤式は、

$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^n Vp_i &= \sum_{i=1}^n \left[\sum_{j=1}^m q_j \cdot P_{ij}^2 - \left(\sum_{j=1}^m q_j \cdot P_{ij} \right)^2 \right] \\ &= \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^m q_j \cdot P_{ij}^2 - \sum_{i=1}^n \left(\sum_{j=1}^m q_j \cdot P_{ij} \right)^2 \quad \dots\dots\dots ⑪ \end{aligned}$$

よって⑧⑨式と⑪式より

$$\bar{d}v - Dv = \sum_{i=1}^n Vp_i \quad \dots\dots\dots ⑦式の証明$$

このことは、言葉をかえていえば、市町村の平均的な得票偏重度が選挙区全体の偏重度から逸脱している程度を示す数値 $\bar{d}v - Dv$ は、各候補者ごとの得票率分散に分解できるということであり、それによって、各候補者のこの逸脱度に対する貢献度を算出することが可能となる。これを表1・表2の事例で計算すると、この選挙区の逸脱度0.1378は、候補者Aの分散0.07215、候補者Bの分散0.06475、候補者Cの分散0.0009の和に等しく、各候補者は、それぞれ、52.36%、46.99%、0.65%の割合でこの逸脱度には貢献しているということになる(表3参照)。

表3 得票率分散和(＝逸脱度)の計算例

| 候補者 市町村 | A | B | C |
|------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------|
| 1 市 | $(0.7 - 0.46)^2 \times 0.35$ | $(0.1 - 0.35)^2 \times 0.35$ | $(0.2 - 0.19)^2 \times 0.35$ |
| 2 市 | $(0.6 - 0.46)^2 \times 0.3$ | $(0.25 - 0.35)^2 \times 0.3$ | $(0.15 - 0.19)^2 \times 0.3$ |
| 3 町 | $(0.1 - 0.46)^2 \times 0.2$ | $(0.7 - 0.35)^2 \times 0.2$ | $(0.2 - 0.19)^2 \times 0.2$ |
| 4 町 | $(0.05 - 0.46)^2 \times 0.1$ | $(0.7 - 0.35)^2 \times 0.1$ | $(0.25 - 0.19)^2 \times 0.1$ |
| 5 村 | $(0.2 - 0.46)^2 \times 0.05$ | $(0.6 - 0.35)^2 \times 0.05$ | $(0.2 - 0.19)^2 \times 0.05$ |
| 計(分数) | 0.07215 | 0.06475 | 0.0009 |
| 同構成比 | 52.36% | 46.99% | 0.65% |

→計 0.1378
(=0.508-0.3702)

(4) 選挙区特性としての逸脱比 —DS 指数の提案—

上に証明した⑦式で、 Dv を右辺に移行すれば、

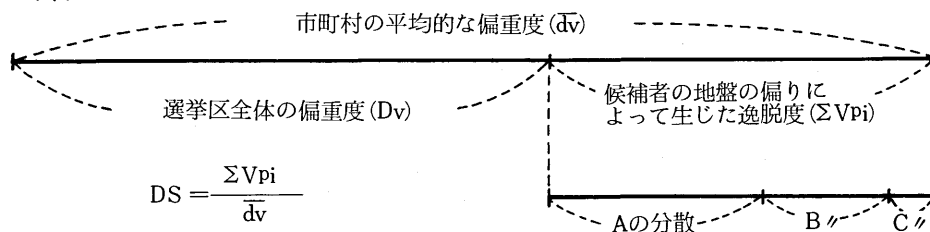
$$\bar{d}v = Dv + \sum_{i=1}^n Vp_i \quad \dots\dots\dots(12)$$

となる。つまり、その選挙区内の市町村の平均的な偏重度 ($\bar{d}v$) は、その選挙区が全体としてもっている固有の偏重度 (Dv) と、各候補者の地盤の偏りによって生じた逸脱度 ($\sum_{i=1}^n Vp_i$) とに分解される。そこで、 $\sum_{i=1}^n Vp_i / \bar{d}v$ という比をとることによって、市町村の平均的な得票偏重度のなかで、候補者の地盤の偏りによって生じた逸脱度 (degree of deviancy) がどの程度のウェイトを占めているかを算出することができる。この逸脱比を、DS 指数と呼ぶことにする。

$$DS = \sum_{i=1}^n Vp_i / \bar{d}v = (\bar{d}v - Dv) / \bar{d}v \quad \dots\dots\dots(13)$$

表1・表2の事例では、このDS 指数は、 $0.1378 \div 0.508 = 0.2713$ と算出される。このDS 指数を用いることにより、選挙区相互の得票の偏重性を比較することが可能となるので、これでもって、候補者の地盤の偏りからみた選挙区特性を数値的に表現することを試みてみたい。

図1



なお、ここにあらわれてきた各候補者の得票率分散は、筆者が以前に提案したRS 指数と密接な関連をもっている。RS 指数は、最初にのべたように、特定候補者の市町村得票率の平均偏差 $\sum_{j=1}^m q_j |P_{ij} - \bar{P}_i|$ を基礎にしている。これに対して得票率分散は、統計学的な解析に便利のように、市町村ごとの偏差を平方処理したものであり ($\sum_{j=1}^m q_j (P_{ij} - \bar{P}_i)^2$)、その平方根すなわち標準偏差をとれば、算出される数値に違いはあるが、平均偏差と同様に候補者の集票特性をあらわす指標となる。

ところが、単なる平均偏差や得票率分散 (または標準偏差) では、その数値は候補者の得票率の大きさに影響を受け、例えば泡沫候補などによくみられるように、極端に地域に偏重して集票している候補者であっても、得票率が低ければその数値は極めて小さいものとなり、それでは候補者相互で得票の偏重度を比較することはできない。RS 指数は、その難点を克服するために、平均偏差を得票率で割って相対化し、さらに、絶対値であらわされる偏差のプラス分とマイナス分との同値重複を避けるために2で割ったものである。もちろん、このような相対化は、得票率分散についても数理的には可能であるが、RS 指数の場合には、候補者の自己の平均的な集票力からの各市町村における逸脱度を、数値の上で直接的に意味づけることが可能であるので⁽⁸⁾、候補者個人を対象とした得票偏重の分析には説明に便利であるように思われる。

そこで、以下選挙区間での偏重度の比較分析には得票率分散、逸脱度 ($\bar{d}v - Dv$)、DS 指数を用い、候補者個人の集票特性をみる場合にはRS 指数を用いて、衆議院選挙の事例から若干の実態分析を行なってみることにする。

註

- (1) 水崎節文「衆議院総選挙における地域偏重的集票の計量分析試論」岐阜大学教養部研究報告, 第 17 号, 1981 年。
- (2) RS 指数は, 特定候補者の全得票数に対する各市町村での得票比率と, 各市町村の有効投票構成比とから算出することができ, その候補者の選挙区得票率にはかわらない。例えば, 選挙区の有効投票総数を V , 市町村 j の有効投票数を $v_j (\therefore q_j = v_j/V)$, 候補者 i の得票総数を X_i , 市町村 j における得票数を $x_{ij} (\therefore X_i = V \cdot \bar{P}_i, x_{ij} = v_j \cdot P_{ij})$ とすれば, RS の式は次のように変形できる。
- $$\begin{aligned} RS &= \frac{\sum_{j=1}^m q_j |P_{ij} - \bar{P}_i|}{2 \bar{P}_i} = \frac{1}{2} \cdot \frac{\sum_{j=1}^m v_j \left| \frac{x_{ij}}{v_j} - \bar{P}_i \right|}{V \cdot \bar{P}_i} = \frac{1}{2} \cdot \frac{\sum_{j=1}^m |x_{ij} - v_j \bar{P}_i|}{V \cdot \bar{P}_i} \\ &= \frac{1}{2} \sum_{j=1}^m \left| \frac{x_{ij}}{V \bar{P}_i} - \frac{v_j}{V} \right| = \frac{1}{2} \sum_{j=1}^m \left| \frac{x_{ij}}{X_i} - q_j \right| \end{aligned}$$
- よって, RS 指数とは, 特定候補者の得票のなかでの各市町村構成比と, 各市町村の有効投票構成比との差の累積としてあらわされるわけで, 候補者の得票率 (\bar{P}_i) は消去されている。このことについての具体的事例にそくした説明は, 前掲水崎論文 pp.31-32 参照。
- (3) 衆議院総選挙において当選 9 回以上の自民党候補者の得票率と RS 指数との相関・回帰分析について, 筆者は, 第 2 回日本選挙学会 (1982 年 5 月 23 日, 慶応義塾大学) で報告したが, 本稿では, その対象を連続 9 回以上の立候補者に拡大し, 後章 (III) にその結果を収録した。
- (4) Douglas W. Rae, The Political Consequence of Electoral Law, Yale University Press, 1967. D. W. Rae and Michael Taylor, An Analysis of Political Cleavage, Yale University Press, 1970.
- (5) そのもっとも先駆的な試みとしては, M. Taylor and V. M. Herman, "Party Systems and Government Stability" in the American Political Science Review, vol.65, No.1, March 1971 がある。その分析の手法と結果については, 水崎節文「比較政党研究における計量分析—破片化指数の効果とその応用—」(田口富久治他編「民主主義・社会主義・ナショナリズム」所収, お茶の水書房, 1983 年刊行予定) 参照。
- (6) Donald A. Gross, "Units of Analysis and Rae's Fractionalization Index" in the Comparative Political Studies, vol.15, No.1, April 1982.
- (7) Ibid., pp.90-92.
- (8) その意味づけについては, 前掲水崎論文 pp.31-33, 特に表 5・表 6 の事例を参照。

II 衆議院選挙区への適用

現在の衆議院 130 選挙区は, 鹿児島県奄美群島区の定数 1 を除けば 3~5 人区で構成され, また, それぞれの選挙区によって候補者数には著しい差異がみられる。最近, 各政党は候補者数をかなり限定する方向にあり, 昭和 55 年の第 36 回総選挙では, 候補者総数は 835 人であり, 各選挙区の候補者数は, 最高が宮城県 1 区の 10 人, 最低は 8 選挙区における 4 人となっている (但し奄美群島区を除く)。

これらの選挙区における得票の候補者への偏重度をみる場合, 選挙区全体としての偏重度 Dv は, 当然のことながら候補者数によってかなり影響を受ける。例えば, 候補者数 n 人の場合, $Dv (= \sum_{i=1}^n \bar{P}_i^2)$ の値は,

$$\frac{1}{n} \leq Dv \leq 1$$

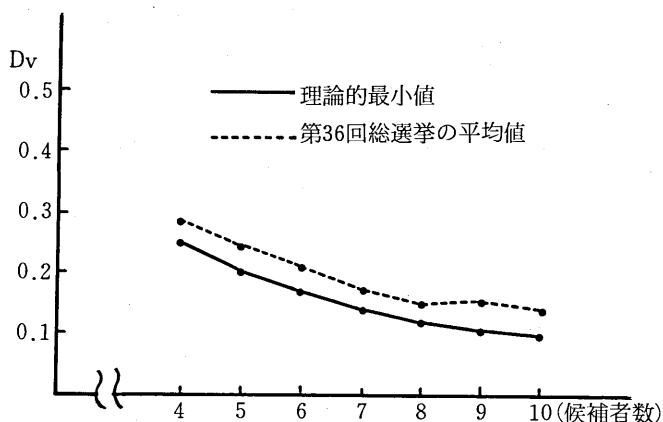
の範囲をとる。すなわち, Dv の最小値は n 人の候補者がすべて等しい数で得票をした場合で $\frac{1}{n}$ となり, この最小値は候補者数が増加するにしたがって減少し, その変化は, 図 2 にみられるようにカービリーなものである。第 36 回総選挙における奄美群島区 (候補者 2 人) を

除く 129 の選挙区を候補者数によって類別し、それぞれのグループにおける D_v の平均値を上記の最小値と対比すると、表 4・図 2 のようになり、やはり、実際の選挙における D_v の値も、一般的傾向としては、候補者数に対応して同様な変化が生じていることがわかる。

表 4 候補者数別にみた選挙区 D_v の理論的最小値と実態(第36回総選挙)

| 候 補 者 数 | 選 挙 区 数 | 最 小 値 | D_v 平 均 値 |
|---------|---------|--------|-------------|
| 10 | 1 | 0.1 | 0.1409 |
| 9 | 10 | 0.1111 | 0.1549 |
| 8 | 17 | 0.125 | 0.1517 |
| 7 | 32 | 0.1429 | 0.1723 |
| 6 | 35 | 0.1667 | 0.2048 |
| 5 | 26 | 0.2 | 0.2435 |
| 4 | 8 | 0.25 | 0.2790 |

図 2 候補者数による選挙区 D_v の変化



そこで、選挙区特性としての得票の地域偏重度を相互に対比するには、前に述べたように、選挙区の D_v の値からの各市町村の平均的偏重度 \bar{d}_v の逸脱度を算出し ($\bar{d}_v - D_v$)、さらその \bar{d}_v に対する比、すなわち逸脱比 DS を算出することが必要となる。ここでは、その手法を第 36 回総選挙における事例に適用し、選挙区相互の対比を行ない、かついくつかの特徴的な選挙区の傾向を示してみることとする。

(1) 表 5 は、鹿児島県 3 区と石川県 1 区について、得票偏重度をみるのに必要な各種の指数を算出した結果を示したものである。両選挙区は、ともに定数 3 に対して候補者数 5 であるが、候補者および当選者の政党別構成を異にしている。この 2 つの選挙区では、 DS の値はともにほぼ 0.25 で、選挙区全体としての候補者への票の偏重度は等しいといえる。しかし、市町村における偏重度の平均値は鹿児島県 3 区の方がかなり高く、したがって、その逸脱度 ($\bar{d}_v - D_v$) は、鹿児島県 3 区の 0.1249 に対して石川県 1 区は 0.0309 にすぎない。そこで逸脱比 DS は、それぞれ 0.3322, 0.1093 と算出される。

鹿児島県 3 区では、各市町においてその偏重度 d_{vj} が一般的に高く、最高は曾於郡末吉町

表 5

m : 市町村数 n : 候補者数

| 鹿児島県 3 区 (定 3) | | m=24 n = 5 | | | |
|----------------|----------|---------------|----------------|--------|--------|
| Dv | 0.2512 | | | | |
| $\bar{d}v$ | 0.3761 | 分散 (構成比) | 得票率 | RS | |
| $\bar{d}v-Dv$ | 0.1249 → | 二階堂 進(自) | 0.0368(0.2943) | 0.3000 | 0.2531 |
| DS | 0.3322 | 山中 貞則(自) | 0.0684(0.5475) | 0.2717 | 0.4291 |
| | | 橋口 隆(自) | 0.0186(0.1491) | 0.2110 | 0.2848 |
| | | 上西 和郎(社) | 0.0011(0.0089) | 0.2067 | 0.0729 |
| | | 宮地 利雄(共) | 0.0000(0.0002) | 0.0106 | 0.2145 |

| 石 川 県 1 区 (定 3) | | m=17 n = 5 | | | |
|-----------------|----------|---------------|----------------|--------|--------|
| Dv | 0.2518 | | | | |
| $\bar{d}v$ | 0.2827 | 分散 (構成比) | 得票率 | RS | |
| $\bar{d}v-Dv$ | 0.0309 → | 森 喜朗(自) | 0.1755(0.5680) | 0.3158 | 0.1726 |
| DS | 0.1093 | 奥田 敬和(自) | 0.0109(0.3526) | 0.3018 | 0.1471 |
| | | 嶋崎 讓(社) | 0.0014(0.0437) | 0.2147 | 0.0592 |
| | | 宮本 一二(民) | 0.0007(0.0225) | 0.1046 | 0.0784 |
| | | 森 昭(共) | 0.0004(0.0132) | 0.0631 | 0.1527 |

(山中貞則候補の出身地、同候補の町内得票率は 73.59 %) の 0.5775, 次いで肝属郡高山町 (二階堂進候補の出身地、同町内得票率 71.93 %) の 0.5703 であり、選挙区内 24 市町において偏重化指数 dv_i が 0.4 を超えるのは 9 町におよび、そのうち 6 町は山中の地盤である曾於郡に集中している。このことは、同候補特有の高い RS 指数 (0.4291) から説明できよう。これに比して、石川県 1 区では、 dv_i の最高は能美郡根上町 (森喜朗候補の出身地、同町内得票率 82.03 %) の 0.6828 であるが、同町の選挙区内有効投票構成比は 2.4 % にすぎず、しかも同町を除けば dv_i の値が 0.4 を超える市町村は皆無である。また、逸脱度 ($\bar{d}v-Dv$), すなわち各候補者の市町村得票率分散の総計のなかで最高の比率 (56.8 %) を占める森候補にしても、RS 指数は 0.1726 と相対的に低く、これは、鹿児島県 3 区の自民党候補者の誰よりも低い数値である。

要するに、この 2 つの選挙区は、選挙区全体の得票偏重度はほぼ等しいにもかかわらず、市町村段階での得票の特定候補者への偏りにおいて著しい差があり、それだけ得票の地域偏重からみた選挙区特性を異にしている事例である。

(2) 表 6 は、長野県 3 区と宮崎県 2 区との同様な対比である。両選挙区は、議員定数に違いはあるが、ともに候補者数が 5 人で、しかも自民 3, 社会 1, 共産 1 となっている。この 2 つの選挙区では、 $\bar{d}v$ がともに 0.3 をわずかに出た数値となっており、したがって、各市町村における平均的な得票偏重度はほぼ等しい。しかし、選挙区全体の偏重度 Dv をみると、長野県 3 区は 0.2007 で、これは候補者数が 5 である場合の最低値 0.2 にはほとんど近く、文字通り 5 人の候補者の少数激戦区となっている。これに対して宮崎県 2 区では、 Dv はこれを上回る数値の 0.2427 で、表 4 の候補者 5 人の選挙区の全国平均値に近い。要するに、宮崎県 2 区における各市町村の平均的な偏重度 $\bar{d}v$ には、選挙区固有の偏重度 Dv に影響される部分が長野県 3 区よりは多く含まれているわけで、それだけ市町村偏重の逸脱度 ($\bar{d}v-Dv$) が相対的に低いということがいえる。したがって、逸脱比 DS 指数を算出すると、長野県 3 区は 0.3372, 宮崎県 2 区は 0.1957 とかなりの有意差があらわれてくる。このことは、宮崎県 2 区

表6

| 長野県3区(定4) | | m=36 n=5 | | | |
|--------------------|--------|----------|----------|----------------|---------------|
| Dv | 0.2007 | | | | |
| \overline{dv} | 0.3027 | | 分散(構成比) | 得票率 | RS |
| $\overline{dv}-Dv$ | 0.1021 | → | 小川 平二(自) | 0.0230(0.2250) | 0.2157 0.3196 |
| DS | 0.3372 | { | 串原 義直(社) | 0.0054(0.0530) | 0.2107 0.1375 |
| | | | 宮下 創平(自) | 0.0320(0.3133) | 0.1974 0.3865 |
| | | | 林 百郎(共) | 0.0047(0.0458) | 0.1884 0.1534 |
| | | | ----- | | |
| | | | 中島 衛(自) | 0.0370(0.3630) | 0.1878 0.4633 |

| 宮崎県2区(定3) | | m=18 n=5 | | | |
|--------------------|--------|----------|----------|----------------|---------------|
| Dv | 0.2427 | | | | |
| \overline{dv} | 0.3017 | | 分散(構成比) | 得票率 | RS |
| $\overline{dv}-Dv$ | 0.0591 | → | 堀之内久男(自) | 0.0169(0.2856) | 0.2782 0.2210 |
| DS | 0.1957 | { | 小山 長規(自) | 0.0333(0.5644) | 0.2557 0.3180 |
| | | | 瀬戸山三男(自) | 0.0071(0.1202) | 0.2322 0.1507 |
| | | | ----- | | |
| | | | 児玉 末男(社) | 0.0017(0.0286) | 0.2135 0.0665 |
| | | | 佐藤 誠(共) | 0.0001(0.0012) | 0.0204 0.1420 |

の3人の自民党候補者のRS指数が長野県3区の3人の自民党候補者の誰よりも低いことから、予測されたことであった。

(3) Dvの値が非常に高いにもかかわらず、DS指数が低い選挙区の極端な事例としては、香川県2区(定3、候補者5)をあげることができる(表7)。同選挙区は、もともと故大平首相への票の集中が激しく、Dvの値が全国でも突出して高い選挙区であったが、第36回総選挙の選挙戦のさなかに大平候補が急死したために、身代りとして娘婿の森田一候補が立ち、62.15%という驚異的な得票率をあげた。その結果、Dvの値は第35回の0.3599から0.4417とはね上り、これは奄美群島区を除けば、全国で群を抜いて1位である(2位は候補者4人の愛媛1区の0.3005、以下すべて0.3未満)。ところが、こうした森田候補への極端な票の集中は、地域によってはさらに激しくあらわれているけれども(例えば、三豊郡9町のうち8町で0.5を超え、さらに5町は0.6を超える)、その反面、選挙区内24市町の半数に当たる12市町の $d v_i$ はDvを下まわるといふ負の逸脱現象が生じている。その結果、全市町の平均値($\bar{d}v$)は0.4568でDvをわずかに上まわるだけであり($\bar{d}v-Dv=0.0151$)、したがって、DS指数は0.0332と極めて小さな値となっている。こうした特異な現象は、候補者数が少なく、しかもその中の1人が選挙区全域を通じて圧倒的な支持を得ている場合にあらわれる。

表7

| 香川県2区(定3) | | m=24 n=5 | | | |
|---------------|----------|----------|----------------|--------|--------|
| Dv | 0.4417 | | | | |
| $\bar{d}v$ | 0.4568 | 分散(構成比) | 得票率 | RS | |
| $\bar{d}v-Dv$ | 0.0151 → | 森田 一(自) | 0.0091(0.6015) | 0.6215 | 0.0576 |
| DS | 0.0332 | 久保 等(社) | 0.0017(0.1097) | 0.1806 | 0.0827 |
| | | 加藤常太郎(自) | 0.0042(0.2763) | 0.1453 | 0.1862 |
| | | 久保 文彦(共) | 0.0001(0.0094) | 0.0403 | 0.1305 |
| | | 谷川 尚敬(無) | 0.0000(0.0030) | 0.0124 | 0.1660 |

(4) 逸脱比を示すDS指数が高い選挙区は、 D_v に対して \bar{d}_v が相対的に高いところである。すなわち、選挙区全体としては候補者の力量が比較的接近していながら、各候補者は自己の地盤を強力に保持し、それぞれがその地盤から重点的に集票している場合である。こうした条件が可能となるのは、自民党が多数の候補者を公認している選挙区、したがって副次的には議員定数が多い選挙区ということになろう。

表8

| 佐賀県全区 (定5) | | m=49 n=8 | | | |
|-------------------|----------|----------|-----------------|--------|--------|
| D_v | 0.1594 | | | | |
| \bar{d}_v | 0.3588 | | | | |
| $\bar{d}_v - D_v$ | 0.1995 → | 分散 (構成比) | 得票率 | RS | |
| DS | 0.5559 | 保利 耕輔(自) | 0.0709 (0.3552) | 0.1935 | 0.5207 |
| | | 三池 信(自) | 0.0414 (0.2074) | 0.1775 | 0.4577 |
| | | 八木 昇(社) | 0.0045 (0.0225) | 0.1589 | 0.1669 |
| | | 愛野興一郎(自) | 0.0352 (0.1763) | 0.1539 | 0.3964 |
| | | 山下 徳夫(自) | 0.0304 (0.1525) | 0.1512 | 0.3546 |
| | | 大坪健一郎(自) | 0.0170 (0.0854) | 0.1333 | 0.3806 |
| | | 武藤 明美(共) | 0.0001 (0.0007) | 0.0287 | 0.1894 |
| | | 山瀬 徹(諸) | 0.0000 (0.0000) | 0.0030 | 0.1913 |

第36回総選挙で、DS指数がもっとも高かったのは佐賀県全区の0.5559であり、そこでは定数5に対して自民党は5人の候補者を公認し、前回に続いて4人を当選させている。この選挙区では、表8に掲げたように、 D_v は0.1594であるが、選挙区内49市町村のうち21市町村において d_{vj} が0.4を超え（最高は東松浦郡七山村の0.8353）、市町村平均値 \bar{d}_v は0.3588という高い数値を示している。また、個人別にRS指数をみても、1位当選の保利耕輔候補の0.5207を筆頭に、自民党候補はすべて0.35を上まわっている。強固な地盤割りに支えられた保守安定区といえる。

それに次いでDS指数が高い選挙区をあげると、千葉県3区の0.4804（定5，自民4，全員当選）、宮城県2区の0.4731（定4，自民4，3人当選）、熊本県2区の0.4620（定5，自民5，4人当選）などがあり、いずれも、定数4～5，自民党候補者数4～5の選挙区である。しかし、自民党候補者が4人以上の選挙区であっても、山形県1区のようにかなり低いDS指数（0.1723）が算出されるところもあり、DS指数の高い数値は、自民党多数公認選挙区からあらわれるということはいえても、自民党公認数がDS指数の高さを条件づけているわけではない。参考までに、自民党候補者4人以上の11選挙区における各種指数を表9に掲げておく。

(5) 衆議院130選挙区のなかで、自民党が3人の候補者を公認した選挙区は50区をかぞえ、もっとも多い（2人公認区は45区）。しかし、それらの選挙区でも、自民党以外の候補者の所属政党の組合せとなると多様であり、これらをすべていくつかのパターンに類別することは困難であろう。ただその中で、自民党以外の政党で全選挙区に必ず候補者を擁立しているのが社会党と共産党であるという事情からみれば、自民3，社会1，共産1という候補者構成は、一定の共通の選挙区パターンとみてよいであろう。それは、新潟県4区，富山県2区，長野県3区，三重県2区，山口県1区，愛媛県3区，宮崎県2区，鹿児島県3区の8選挙区であり、これに無所属または諸派が加わってもその得票率が1％に満たない富山県1区，香川県1区，大分県2区を加えると、11選挙区となる。これらの選挙区は、自・社・共

表9 自民党候補者4人以上の選挙区(DS指数順)

| 選挙区(定) | 候補者数 | 自民(当) | Dv | $\bar{d}v$ | $\bar{d}v-Dv$ | DS |
|--------|------|-------|--------|------------|---------------|--------|
| 佐賀全(5) | 8 | 5(4) | 0.1594 | 0.3588 | 0.1995 | 0.5559 |
| 千葉3(5) | 9 | 4(4) | 0.1391 | 0.2677 | 0.1286 | 0.4804 |
| 宮城2(4) | 7 | 4(3) | 0.1812 | 0.3439 | 0.1627 | 0.4731 |
| 熊本2(5) | 7 | 5(4) | 0.1677 | 0.3117 | 0.1440 | 0.4620 |
| 長崎2(4) | 8 | 4(3) | 0.1656 | 0.2454 | 0.0797 | 0.3249 |
| 青森1(4) | 8 | 4(3) | 0.1462 | 0.2060 | 0.0598 | 0.2903 |
| 茨城3(5) | 7 | 4(4) | 0.1584 | 0.2202 | 0.0618 | 0.2809 |
| 山梨全(5) | 8 | 4(4) | 0.1373 | 0.1829 | 0.0455 | 0.2490 |
| 福島2(5) | 7 | 4(4) | 0.1699 | 0.2246 | 0.0547 | 0.2437 |
| 徳島全(5) | 8 | 4(4) | 0.1615 | 0.2044 | 0.0429 | 0.2098 |
| 山形1(4) | 7 | 4(3) | 0.1683 | 0.2033 | 0.0350 | 0.1723 |

という55年体制型の候補者構成であって、それだけにその後の多党化傾向の影響をそれ程受けていない農村型もしくは準農村型選挙区と考えられ、前にあげた自民党候補者4人以上の選挙区に次ぐ保守安定区といえる。

表10にみられるように、これらの選挙区のDS指数も、長野県3区の0.3372から香川県1区の0.0757まで広い範囲に分布しており、得票の地域偏重がこうした候補者の政党別構成に直接起因するとは考えられない。しかし、この11選挙区のDS指数の平均値0.2147(標準偏差0.0868)は、自民党候補者4人の9選挙区の平均値0.3007(同0.0986)に比して、明らかに低い数値となっている。

表10 候補者が自民3, 社会1, 共産1の選挙区(DS指数順)

| 選挙区(定) | 候補者数 | 自民(当) | Dv | $\bar{d}v$ | $\bar{d}v-Dv$ | DS |
|---------|------|-------|--------|------------|---------------|--------|
| 長野3(4) | 5 | 3(2) | 0.2207 | 0.3027 | 0.1021 | 0.3372 |
| 鹿児島3(3) | 5 | 3(3) | 0.2512 | 0.3761 | 0.1249 | 0.3322 |
| ※富山1(3) | 6 | 3(3) | 0.2304 | 0.3247 | 0.0943 | 0.2905 |
| 富山2(3) | 5 | 3(2) | 0.2448 | 0.3433 | 0.0985 | 0.2870 |
| 愛媛3(3) | 5 | 3(2) | 0.2457 | 0.3312 | 0.0855 | 0.2581 |
| 宮崎2(3) | 5 | 3(3) | 0.2427 | 0.3017 | 0.0591 | 0.1957 |
| 新潟4(3) | 5 | 3(2) | 0.2389 | 0.2949 | 0.0560 | 0.1900 |
| 三重2(4) | 5 | 3(3) | 0.2318 | 0.2710 | 0.0393 | 0.1449 |
| 山口1(4) | 5 | 3(3) | 0.2304 | 0.2641 | 0.0338 | 0.1279 |
| ※大分2(3) | 6 | 3(2) | 0.2393 | 0.2727 | 0.0334 | 0.1224 |
| ※香川1(3) | 6 | 3(2) | 0.2332 | 0.2522 | 0.0191 | 0.0757 |

※印は、低得票の諸派・無所属を含む。

(6) DS指数が低く算出されるのは、集計単位となっている地域の間で候補者への投票の偏りにそれ程大きな差異がない場合で、前にあげた香川県2区のような特異な事例を除けば、一般には大都市型選挙区がこれに該当する。それは、大都市選挙区では、一般に多党化情況が顕著で各政党が候補者を1人に限定する傾向にあること、集計単位となっている市区町村の間で利害や意識面においてそれ程大きな地域間隔差がみられないこと、得票の集計単位が人口的側面からいえばかなり広域であって、したがって選挙区内の集計区域数が極端に少ないこと、等に起因している。特に集計単位区域数が2（東京都3・5・9区）または3（東京都1・4・6・8・10区）の選挙区などは、こうした指数算出そのものに有意性を認めることは困難であろう。しかし、かりに東京都内の各区の内部を例えば投票区単位に細分して集計が公表されたとしても、それによって偏重度に大きな差異があらわれるとは考えられない。これらの限界を承知の上で、東京都11選挙区、大阪府7選挙区について各種指数を参考値として算出すると、表11のようになる。

表11 東京都・大阪府の各選挙区

| 選挙区(定) | 候補者数 | 自民(当) | Dv | $\bar{d}v$ | $\bar{d}v-Dv$ | DS |
|----------|------|-------|--------|------------|---------------|--------|
| 東京 1 (3) | 9 | 2 (2) | 0.1977 | 0.1923 | 0.0046 | 0.0239 |
| 〃 2 (5) | 6 | 1 (1) | 0.2178 | 0.2190 | 0.0012 | 0.0056 |
| 〃 3 (4) | 7 | 2 (2) | 0.1519 | 0.1544 | 0.0024 | 0.0158 |
| 〃 4 (5) | 9 | 1 (1) | 0.1768 | 0.1792 | 0.0024 | 0.0133 |
| 〃 5 (3) | 7 | 1 (1) | 0.1814 | 0.1837 | 0.0022 | 0.0121 |
| 〃 6 (4) | 8 | 2 (1) | 0.1473 | 0.1625 | 0.0151 | 0.0932 |
| 〃 7 (4) | 6 | 2 (1) | 0.1714 | 0.1775 | 0.0061 | 0.0341 |
| 〃 8 (3) | 5 | 2 (2) | 0.2352 | 0.2437 | 0.0085 | 0.0350 |
| 〃 9 (3) | 5 | 1 (1) | 0.2114 | 0.2137 | 0.0023 | 0.0108 |
| 〃 10 (5) | 7 | 2 (2) | 0.1706 | 0.1979 | 0.0274 | 0.1384 |
| 〃 11 (4) | 6 | 1 (1) | 0.2064 | 0.2255 | 0.0191 | 0.0847 |
| 大阪 1 (3) | 6 | 1 (1) | 0.2219 | 0.2276 | 0.0057 | 0.0250 |
| 〃 2 (5) | 6 | 2 (1) | 0.1819 | 0.1888 | 0.0069 | 0.0366 |
| 〃 3 (4) | 6 | 1 (1) | 0.2060 | 0.2150 | 0.0090 | 0.0419 |
| 〃 4 (4) | 5 | 1 (1) | 0.2320 | 0.2347 | 0.0027 | 0.0114 |
| 〃 5 (4) | 6 | 1 (1) | 0.2035 | 0.2098 | 0.0063 | 0.0300 |
| 〃 6 (3) | 5 | 1 (1) | 0.2245 | 0.2346 | 0.0101 | 0.0431 |
| 〃 7 (3) | 4 | 1 (1) | 0.2565 | 0.2609 | 0.0044 | 0.0170 |

以上、いくつかの特徴的なパターンの選挙区について、得票の地域偏重度を示す指数を算出してみたが、それは、これらの指数を提案した前提に、次のような仮説があったからである。すなわち、①自民党候補者が多い選挙区は得票の偏重度が大きい。②農村型の選挙区は

ど得票の偏重度が大きい。③保守安定区といわれる選挙区は、その原因の一部に得票の偏重度の高さがある。しかし、これらの仮説を検証するには、衆議院全選挙区についての指数の算出、都市型・農村型ディメンジョンにおける各選挙区の位置づけ（これは今日D I D指数、産業別構成比による指数など多く提案されている）、保守安定区の数量的指標の開発等、多くの課題が残されている。現在のところ、これらの作業は未だ不十分であるので、若干の抽出的な選挙区の例示にとどまらざるをえなかったことをお断りしておく。

III 候補者の地域集票特性——自民党候補者のRS指数——

これまで、得票の地域偏重性をそれぞれの選挙区に固有な特性として把握する方法を検討してきたが、ここでやや角度をかえて、候補者個人の地域集票特性に焦点をあてて、若干の分析結果を提示してみたい。この特性をあらわす指標としては、筆者がすでに提案し、本稿でもふれてきたRS指数を用いる。もちろん、RS指数として算出される数値は、これまで検討してきたDS指数に対しても一定の条件で規定要因となっているが、すでにのべたように、RS指数は候補者の得票率に影響されない地域偏重的集票の度合を表現するので、選挙区を超えた候補者の集票パーソナリティを比較検討することが可能である。

ここで紹介する分析結果は、第1には、第36回総選挙における自民党公認候補者のRS指数の分布と傾向についてであり、第2には、自民党多選議員の得票率とRS値の経年的推移についてである。分析の対象を自民党候補者に限定したのは、自民党以外の政党では、わずかの選挙区を除いては複数の候補者を立てず、それらの候補者は一般にRS指数が低く、したがってまた得票率分散が著しく低いために、選挙区の地域偏重度への寄与率($Vp_i / \bar{d}v - Dv = Vp_i / \sum_{i=1}^n Vp_i$)にそれほどの有意性をみとめることができなかったからである。自民党以外でRS指数が高い候補者も、一般には得票率が著しく低く、したがって得票率分散、そして同時に選挙区偏重度への寄与率が極めて低くなる傾向にある。このタイプの候補者は、保守的地盤の強い選挙区で農村票をほとんど把握できない共産党新人候補に顕著にみられる。

(1) 自民党候補者のRS指数

筆者は、第36回総選挙に自民党の公認を受けて立候補した310人について、RS指数の算出を行ってみた。その結果の概要は、表12～14に示した通りである。すなわち、自民党候補者のRS指数の平均値は0.2128であるが、最高は0.5789から最低は0.0063にいたるまで広い分布がみられる。表12は、便宜的に、310人の自民党候補者のうちでRS指数の高い順に20人、低い順に20人を抽出してみたものである。当然のこととはいえ、RS指数の高い候補者が農村型選挙区に、低い候補者が都市型選挙区に集中し、かつRS指数とDS指数との間に強い相関があらわれている。

ここで、これらのRS指数が、候補者の得票率、所属選挙区の自民党候補者数、当選回数等からどの程度説明できるかを検討してみたい。

得票率とRS指数との相関をこれら310人の自民党候補者について試算すると、相関係数は-0.3803となり、やや弱い負の相関がみとめられる。一般には、自己の地盤を確保している候補者にとっては、得票率の上昇は地盤外地域への得票の伸長に起因すると考えられるから、この程度の負の相関は予測されるところであった。しかし、得票率は選挙区の数や候

表12 R S 指数高・低ベスト20 (第36回総選挙, 自民党候補者)

×印は落選者

| 高 順位 | 候補者名(選挙区) | R S | 当選 回数 | 選挙区 D S | 得票順 一 候補者数(定) | 低 順位 | 候補者名(選挙区) | R S | 当選 回数 | 選挙区 D S | 得票順 一 候補者数(定) |
|---------|-------------|--------|----------|------------|------------------|---------|--------------|--------|----------|------------|------------------|
| 1 | ×福永 浩介(熊本2) | 0.5789 | 0 | 0.4620 | 6-7(5) | 1 | 浜田卓二郎(埼玉1) | 0.0063 | 1 | 0.0112 | 2-6(3) |
| 2 | 菊池福治郎(宮城2) | 0.5642 | 3 | 0.4731 | 4-7(4) | 2 | 石井 一(兵庫1) | 0.0191 | 5 | 0.0144 | 2-6(5) |
| 3 | ×桐畑 好春(滋賀全) | 0.5318 | 0 | 0.2843 | 6-7(5) | 3 | 石原慎太郎(東京2) | 0.0193 | 4 | 0.0056 | 1-6(5) |
| 4 | 石橋 一弥(千葉3) | 0.5087 | 3 | 0.4804 | 1-9(5) | 4 | 佐藤 一郎(神奈川4) | 0.0248 | 2 | 0.0142 | 2-7(4) |
| 5 | 保利 耕輔(佐賀全) | 0.5207 | 2 | 0.5559 | 1-8(5) | 5 | 越智 通雄(東京3) | 0.0274 | 4 | 0.0158 | 2-7(4) |
| 6 | 近岡理一郎(山形2) | 0.5032 | 1 | 0.3143 | 2-5(4) | 6 | 小坂徳三郎(東京3) | 0.0292 | 5 | 0.0158 | 1-7(4) |
| 7 | 畑 英次郎(大分1) | 0.4796 | 2 | 0.3377 | 3-7(4) | 7 | 小此木彦三郎(神奈川1) | 0.0355 | 5 | 0.0153 | 1-9(4) |
| 8 | 村岡 兼造(秋田2) | 0.4753 | 3 | 0.4064 | 2-7(4) | 8 | 福永 健司(埼玉5) | 0.0356 | 13 | 0.0139 | 1-5(3) |
| 9 | ×西山敬次郎(兵庫5) | 0.4737 | 0 | 0.3309 | 4-6(3) | 9 | 保岡 興治(奄美群島) | 0.0357 | 4 | 0.0161 | 1-2(1) |
| 10 | 渋谷 直蔵(福島2) | 0.4725 | 8 | 0.2437 | 4-7(5) | 10 | 塩川正十郎(大阪4) | 0.0377 | 6 | 0.0114 | 1-5(4) |
| 11 | 安田 貴六(北海道5) | 0.4648 | 4 | 0.4806 | 2-7(5) | 11 | 砂田 重民(兵庫1) | 0.0398 | 5 | 0.0144 | 1-6(5) |
| 12 | ×中島 衛(長野3) | 0.4633 | 2 | 0.3372 | 5-5(4) | 12 | 与謝野 馨(東京1) | 0.0405 | 2 | 0.0239 | 1-9(3) |
| 13 | 東家 嘉幸(熊本2) | 0.4616 | 2 | 0.4620 | 5-7(5) | 13 | 阿部 文男(北海道3) | 0.0416 | 4 | 0.0514 | 1-4(3) |
| 14 | 三池 信(佐賀全) | 0.4577 | 11 | 0.5559 | 2-8(5) | 14 | 北川 石松(大阪7) | 0.0425 | 3 | 0.0170 | 1-4(3) |
| 15 | 坂田 道太(熊本2) | 0.4548 | 15 | 0.4620 | 2-7(5) | 15 | 松永 光(埼玉1) | 0.0431 | 5 | 0.0112 | 1-6(3) |
| 16 | 栗山 明(福島1) | 0.4542 | 2 | 0.2471 | 3-6(4) | 16 | 小坂善太郎(長野1) | 0.0480 | 15 | 0.0232 | 1-6(3) |
| 17 | 古屋 享(岐阜2) | 0.4313 | 6 | 0.3808 | 3-6(4) | 17 | 村田敬次郎(愛知5) | 0.0502 | 5 | 0.0765 | 1-5(3) |
| 18 | 池田 淳(千葉3) | 0.4253 | 2 | 0.4804 | 3-9(5) | 18 | 塩谷 一夫(静岡3) | 0.0505 | 6 | 0.0585 | 1-7(4) |
| 19 | 森 美秀(千葉3) | 0.4234 | 5 | 0.4804 | 4-9(5) | 19 | 関谷 勝嗣(愛媛1) | 0.0517 | 3 | 0.0292 | 3-4(3) |
| 20 | 山中 貞則(鹿児島3) | 0.4219 | 11 | 0.3322 | 2-5(3) | 20 | 湯川 宏(大阪1) | 0.0538 | 3 | 0.0250 | 1-6(3) |

補者数によっても影響を受けるし、RS指数も選挙区の地理的社会的条件、例えば都市・農村指標などに強く作用されるので、この相関から単純な推定を行なうことはできないであろう。

RS指数は、結果としてはその候補者の地域的集票パターンの指標ではあるが、この指数に強く作用する外的要因としては、選挙区内の候補者数、特に同一政党の候補者数が考えられる。そこで、対象とした310人の候補者を、選挙区における自民党候補者数によって5つのグループに分け、それぞれについてRS指数の平均値を算出してみると、表13の最右欄のように、自民党候補者数が多い選挙区ほど明らかにRS指数も高くなっている。そのなかで特に際立っているのは、自民党候補者1の24選挙区（北海道3区・長野県3区・奄美群島区を除けば、すべて関東・中京・京阪神・北九州の大都市およびその周辺都市選挙区）における0.0643という低い数値と、自民党が5人を公認して4人の当選を果たした佐賀県全区と熊本県2区の平均値の0.4232という高い数値である。さらにこの関係を明らかにするために、表13のように、RS指数を0.05きざみの12段階に区分し、自民党候補者数ごとに度数分布を調べてみた。一見して、RS指数は自民党候補者数と或程度の相関をもつことが明らかであるが、RS指数の12のカテゴリーに低い方から1から12までの等間隔のスコアを与えて、自民党候補者数との相関をとってみると、相関係数は0.5762となった。

次に、RS指数を規定する内的要因として、候補者個人の集票パーソナリティを考えなければならないであろう。これについては種々の角度からの把握が可能であろうが、ここでは、やや安易な方法ではあるが、候補者の過去の当選経歴との関係について検討を試みた。後にもみるように、当選経歴の豊かな候補者であっても、当初は自己の出身地を中心とした特定地盤に重点的に依拠して集票し、当選を重ねるうちに、次第に地盤外の浮動票を獲得することによってRS指数が減少していく傾向が看取されるからである。したがって、RS指数はその候補者の当選回数と負の相関をもつという仮説を立ててみた。

表14は、前と同じように、RS指数を12の段階に区分し、候補者の当選回数ごとにその度数分布を示したものである。当選回数ごとのRS指数の平均値をみると、当選の経験のない11人の候補者（うち5人は初出馬）のRS指数の平均値が、他の候補者群のそれに比してかなり高いのが目立っている。次に、当選回数5回以上の161人の候補者には、RS指数が0.45以上はわずかに3人だけで、また当選5回のグループからRS指数平均値もやや低下しており、集票の広域化による安定性を示しているようである。しかし、前と同様にRS指数に12段階の等間隔のスコアを与えて当選回数との相関係数を算出すれば-0.0680となり、その限りでは、相関はほとんどみられないといってよい。つまり、当選回数が一定の段階に達した候補者の間では、その回数は候補者の地域偏重的集票特性の相互比較にはほとんど意味をもたないということになろう。これは、最近自民党が候補者の公認を厳しく限定する傾向にあるため、RS指数が全選挙区を通じて一般に低下してきていることもその一因であろうし、また、議員の新旧交代には、世襲議員まで含めて地盤の継受が厳密に行なわれていることも関係しているのではないと思われる。

以上、RS指数の規定要因として、得票率、自民党候補者数、当選回数を、一定の仮説のもとに検討してみたが、これらの集計表データから客観的に把握できる数値だけではなく、その他の社会経済的、風土的要因なども導入してみる必要があるだろう。

表13 自民党候補者数によるRS指数の12段階分布および平均値

| 自民党 候補者数(選挙区数) | RS指数 (スコア) | 0.05 未満 (1) | 0.05～ (2) | 0.10～ (3) | 0.15～ (4) | 0.20～ (5) | 0.25～ (6) | 0.30～ (7) | 0.35～ (8) | 0.40～ (9) | 0.45～ (10) | 0.50～ (11) | 0.55～ (12) | 計 | RS平均値 |
|-------------------|---------------|-------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|---------------|---------------|---------------|-----|--------|
| 1 (24区) | | 8 | 13 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 24 | 0.0643 |
| 2 (45区) | | 8 | 22 | 18 | 18 | 8 | 9 | 4 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 90 | 0.1572 |
| 3 (50区) | | 0 | 11 | 22 | 29 | 32 | 23 | 10 | 12 | 5 | 5 | 1 | 0 | 150 | 0.2315 |
| 4 (9区) | | 0 | 0 | 3 | 6 | 6 | 5 | 6 | 3 | 4 | 1 | 1 | 1 | 36 | 0.2910 |
| 5 (2区) | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 3 | 0 | 3 | 1 | 1 | 10 | 0.4232 |
| 計 (130区) | | 16 | 46 | 46 | 53 | 46 | 38 | 21 | 19 | 9 | 10 | 4 | 2 | 310 | 0.2128 |

$r=0.5762$

表14 当選回数別にみたRS指数の分布および平均値

| 当選回数 | RS | 0.05 未満 | 0.05～ | 0.10～ | 0.15～ | 0.20～ | 0.25～ | 0.30～ | 0.35～ | 0.40～ | 0.45～ | 0.50～ | 0.55～ | 計 | RS平均値 |
|------|----|------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|--------|
| 0 | | 0 | 2 | 1 | 0 | 0 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 11 | 0.3172 |
| 1 | | 1 | 5 | 2 | 1 | 2 | 3 | 3 | 2 | 0 | 0 | 1 | 0 | 20 | 0.2133 |
| 2 | | 2 | 9 | 9 | 4 | 5 | 4 | 3 | 5 | 1 | 4 | 1 | 0 | 47 | 0.2251 |
| 3 | | 1 | 7 | 6 | 6 | 4 | 6 | 3 | 3 | 0 | 1 | 1 | 1 | 39 | 0.2163 |
| 4 | | 4 | 4 | 7 | 0 | 6 | 2 | 3 | 3 | 2 | 1 | 0 | 0 | 32 | 0.2073 |
| 5 | | 5 | 5 | 4 | 11 | 3 | 3 | 2 | 3 | 1 | 0 | 0 | 0 | 37 | 0.1789 |
| 6 | | 1 | 3 | 3 | 8 | 6 | 2 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 26 | 0.1900 |
| 7 | | 0 | 3 | 4 | 7 | 3 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 20 | 0.1756 |
| 8 | | 0 | 2 | 3 | 3 | 3 | 4 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 17 | 0.2137 |
| 9 | | 0 | 0 | 2 | 3 | 2 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 10 | 0.2075 |
| 10 | | 0 | 2 | 1 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 | 0.1707 |
| 11 | | 0 | 0 | 1 | 4 | 0 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 11 | 0.2646 |
| 12 | | 0 | 2 | 0 | 2 | 5 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 12 | 0.2156 |
| 13 | | 1 | 0 | 1 | 1 | 4 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 9 | 0.2107 |
| 14 | | 0 | 2 | 1 | 1 | 1 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 8 | 0.1867 |
| 15 | | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 4 | 0.2095 |
| 16 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | — |
| 17 | | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0.1774 |
| 計 | | 16 | 46 | 46 | 53 | 46 | 38 | 21 | 19 | 9 | 10 | 4 | 2 | 310 | 0.2128 |

$r=-0.0680$

(2) 自民党多選議員の集票動向

RS 指数を用いた分析には、これまでのような、特定時点の選挙における候補者間の対比やRS 指数を規定する諸要因の解明などの、いわゆる断面的分析のほかに、特定候補者のRS 指数を過去の選挙にまでさかのぼって経年的に分析することが考えられる。その手法については、筆者は、すでに前述した昨年の小論において、鹿児島県3区と岐阜県2区の候補者について試行的に問題提起をしておいたので、ここでは、その後それを用いて行なったデータ分析の結果を紹介しておくことにしたい。

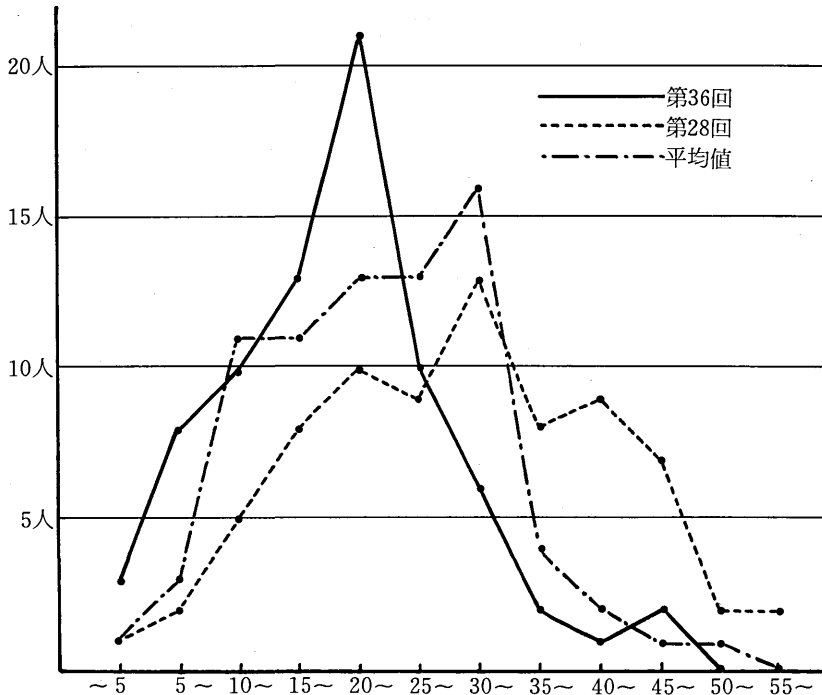
筆者は、第36回総選挙に立候補した自民党候補者のうち、第28回(昭和33年)以来連続9回立候補している76人について、その9回の選挙にわたって得票率とRS 指数を算出した。この76人のうちには、保守系無所属であっても、これまでに自民党の公認を受けたことのある候補者はすべて含まれている。分析対象を第28回以降としたのは、第28回が保守合同によって自民党が誕生して以来最初の選挙であったこと、その少し前にほとんどの選挙区

表15 28～36回総選挙9回連続立候補者(自民)の得票率とRS(%表示)の推移と分布、76人(61選挙区)

| 総選挙(回) | | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 平均 |
|------------|-------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 得票率平均 | | 19.53 | 19.90 | 21.78 | 21.86 | 21.57 | 21.36 | 19.98 | 21.02 | 21.75 | 20.97 |
| S D | | 5.45 | 5.65 | 6.22 | 5.97 | 6.27 | 6.68 | 6.54 | 5.70 | 5.45 | 4.93 |
| R S 値平均 | | 31.11 | 29.20 | 26.26 | 24.69 | 23.75 | 22.61 | 22.12 | 21.76 | 20.73 | 24.63 |
| S D | | 12.38 | 11.37 | 9.81 | 10.12 | 9.94 | 10.49 | 10.39 | 9.85 | 9.59 | 9.60 |
| 相 関 係 数 | | -0.2639 | -0.2710 | -0.2486 | -0.2221 | -0.2510 | -0.3614 | -0.3352 | -0.2711 | -0.2146 | -0.2259 |
| 61選挙区の候補者数 | | 225 | 211 | 187 | 182 | 176 | 176 | 172 | 168 | 170 | |
| R S 値の分布 | 5 未 満 | 1 | 2 | 1 | 3 | 2 | 2 | 2 | 1 | 3 | 1 |
| | 5 ～ | 2 | 1 | 3 | 4 | 5 | 4 | 8 | 8 | 8 | 3 |
| | 10 ～ | 5 | 6 | 7 | 3 | 11 | 17 | 12 | 10 | 10 | 11 |
| | 15 ～ | 8 | 8 | 11 | 20 | 9 | 8 | 14 | 13 | 13 | 11 |
| | 20 ～ | 10 | 9 | 13 | 8 | 10 | 12 | 10 | 18 | 21 | 13 |
| | 25 ～ | 9 | 10 | 14 | 12 | 19 | 19 | 14 | 13 | 10 | 13 |
| | 30 ～ | 13 | 16 | 16 | 15 | 12 | 5 | 8 | 6 | 6 | 16 |
| | 35 ～ | 8 | 9 | 4 | 7 | 4 | 4 | 2 | 3 | 2 | 4 |
| | 40 ～ | 9 | 7 | 4 | 1 | 2 | 2 | 5 | 2 | 1 | 2 |
| | 45 ～ | 7 | 5 | 2 | 3 | 2 | 2 | 0 | 1 | 2 | 1 |
| | 50 ～ | 2 | 3 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 |
| | 55 ～ | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 計 | 76 | 76 | 76 | 76 | 76 | 76 | 76 | 76 | 76 | 76 |

平均欄の数値は、各候補者の9回の選挙における平均値から算出したものである。
得票率・RS 指数は、算出された数値に100をかけて表示した(%)。

図3 RS 指数分布の推移



において大規模な町村合併が行なわれているので、それ以前の選挙では、RS指数算出の単位となる市町村区分が現在とは著しく異なっていること、などの理由による。

まず分析結果として、マクロな視点から、この76人の候補者のRS指数が得票率との関係でこの9回の選挙の間に全体としてどのように変化してきているかを検討し、次にミクロな視点から、候補者個人についての特徴的なRS指数の推移について論及することにする。

表15は、第28回から第36回までの9回の総選挙における得票率およびRS指数の76人の平均値の推移と、各回選挙におけるRS指数の12段階分布を示したものである。各回ごとの得票率平均値はほぼ20%前後で、特に第30回以降はほとんど変化がみられないが、一方、RS指数の平均値は回を追うごとに減少傾向をたどっていることがわかる。このことは、12段階分布の度数の推移をみても明らかで、RS指数が0.40以上の候補者は、第28回では20人であるが、第36回ではわずか3人に減少している。この移動を第28回と第36回および各候補者の9回の平均値について視覚的に表示したのが図3である。こうした傾向の原因としては、表15にも示したように、自民党候補者数が次第に減少してきていること、および、候補者そのものの集票力が当選を重ねるうちに次第に広域に浸透していくこと、などが考えられる。そこで、まず、これら76人の所属する61選挙区の自民党候補者数の合計を各回ごとに算出し、この数値とRS指数平均値との相関をとれば、相関係数は0.9767となった。次に、候補者の集票パターンが広域化していくことについては、各選挙区の状況によって多様な変化があるので、これをマクロな視点からトータルに把握することは困難である。そこで、その実態については、候補者個人を対象としたRS指数の個別的な分析からとらえていくことにしよう。

76人個々の得票率とRS指数の経年的推移については、表16に、候補者名、所属選挙区、

表16 自民党連続9回候補者の得票率とRS指数およびその相関(公認を受けたことのある保守系無所属を含む)

| 当選回数 | 氏 名 | 選挙区(定数) | 36回総選挙 | | 28回～36回総選挙 | | 相関係数 | 回帰係数 | 落選(F)分区(D) |
|------|--------|----------|----------|---------|----------------|---------------|---------|---------|------------------|
| | | | 得票率 % | RS % | 得票率平均(SD) % | RS平均(SD) % | | | |
| 17 | 三木 武夫 | 徳島 全(5) | 20.14 | 17.74 | 19.70(2.97) | 20.54(2.67) | -0.6533 | -0.5881 | |
| 15 | 田中伊三治 | 京都 1(5) | 16.16 | 6.30 | 15.73(1.60) | 5.72(1.62) | -0.6316 | -0.6376 | |
| | 原 健三郎 | 兵庫 2(5) | 16.81 | 10.57 | 17.80(2.73) | 19.37(8.29) | -0.0177 | -0.0539 | |
| | 井出一太郎 | 長野 2(3) | 23.13 | 22.93 | 24.42(1.58) | 22.03(2.51) | -0.3033 | -0.4801 | |
| | 小坂善太郎 | 長野 1(3) | 23.42 | 4.80 | 26.14(3.17) | 7.12(2.83) | 0.4176 | 0.3728 | |
| | 坂田 道太 | 熊本 2(5) | 18.28 | 45.48 | 17.90(2.69) | 51.61(4.36) | -0.8243 | -1.3348 | |
| 14 | 倉石 忠雄 | 長野 1(3) | 21.82 | 8.16 | 23.78(2.20) | 11.35(4.43) | 0.4174 | 0.8418 | |
| | 鈴木 善幸 | 岩手 1(4) | 27.28 | 21.57 | 22.70(4.81) | 32.16(7.96) | -0.9639 | -1.5957 | |
| | 村上 勇 | 大分 1(4) | 21.82 | 29.20 | 20.30(2.85) | 32.21(2.38) | -0.0516 | -0.0430 | 35回F |
| | 園田 直 | 熊本 2(5) | 21.59 | 28.84 | 19.31(4.49) | 38.22(9.04) | -0.7923 | -1.5944 | |
| | 石田 博英 | 秋田 1(4) | 18.14 | 25.40 | 18.78(1.46) | 28.88(4.82) | -0.4654 | -1.5383 | |
| | 江崎 真澄 | 愛知 3(3) | 26.99 | 9.22 | 32.01(5.58) | 11.91(2.43) | 0.4761 | 0.2070 | |
| | 早川 崇 | 和歌山 2(3) | 28.07 | 15.60 | 28.36(3.73) | 20.75(5.89) | -0.4519 | -0.7131 | |
| | 田中 角栄 | 新潟 3(5) | 30.24 | 12.87 | 31.08(5.68) | 16.80(5.82) | -0.7969 | -0.8175 | |
| | 中曽根康弘 | 群馬 3(4) | 23.79 | 11.33 | 23.20(3.61) | 13.57(2.75) | -0.3055 | -0.2328 | |
| 13 | 赤城 宗徳 | 茨城 3(5) | 16.29 | 21.00 | 18.78(3.88) | 24.58(5.03) | -0.3022 | -0.4560 | 34回F |
| | 長谷川四郎 | 群馬 2(3) | 35.96 | 23.95 | 28.81(5.70) | 31.32(7.31) | -0.8796 | -1.1272 | |
| | 荒船清十郎 | 埼玉 3(3) | 37.60 | 20.24 | 36.30(4.23) | 23.10(3.32) | -0.8660 | -0.6801 | |
| | 根本竜太郎 | 秋田 2(4) | 19.88 | 33.10 | 18.63(1.92) | 35.92(2.88) | -0.3650 | -0.5470 | 29回F |
| | 久野 忠治 | 愛知 2(4) | 19.82 | 38.19 | 20.01(2.75) | 44.83(3.60) | 0.1691 | 0.2221 | |
| | 福永 健司 | 埼玉 5(3) | 30.88 | 3.56 | 21.82(3.87) | 12.97(5.75) | -0.4475 | -0.6659 | 34回D |
| | 河本 敏夫 | 兵庫 4(4) | 25.63 | 22.85 | 20.91(2.66) | 29.10(3.86) | -0.6683 | -0.9716 | |
| | 桜内 義雄 | 島根 全(5) | 16.84 | 15.48 | 16.00(1.23) | 18.07(4.43) | -0.1053 | -0.3779 | |
| | 松野 頼三 | 山梨 1(5) | 14.96 | 20.03 | 17.88(2.72) | 18.96(1.85) | -0.5700 | -0.3887 | 35回F |
| | 山口シズエ | 東京 6(4) | 12.16 | 11.30 | 15.06(1.54) | 8.82(2.95) | -0.3918 | -0.7518 | 33・36回F, 31回D |
| 12 | 難尾 弘吉 | 広島 1(3) | 27.93 | 8.78 | 29.26(4.19) | 11.86(4.03) | -0.7648 | -0.7350 | |
| | 福田 一 | 福井 全(4) | 19.99 | 20.53 | 19.06(3.13) | 29.49(7.51) | -0.6197 | -1.4859 | |
| | 木村 武雄 | 山形 1(4) | 20.08 | 24.98 | 17.30(2.26) | 33.00(8.57) | -0.7588 | -2.8735 | 29・35回F |
| | 加藤常太郎 | 香川 2(3) | 14.53 | 18.62 | 22.08(3.86) | 20.72(4.29) | 0.2859 | 0.3177 | |
| | 前尾繁三郎 | 京都 2(5) | 24.13 | 18.49 | 19.37(3.68) | 24.66(5.20) | -0.1843 | -0.2601 | 35回F |
| | 福田 起夫 | 群馬 3(4) | 31.55 | 8.80 | 31.95(5.63) | 10.66(2.33) | -0.7426 | -0.3075 | |
| | 秋田 大助 | 徳島 全(5) | 15.59 | 23.51 | 14.66(2.53) | 31.21(6.38) | -0.5869 | -1.4878 | 34回F |
| | 中野 四郎 | 愛知 4(4) | 18.62 | 23.19 | 18.04(2.95) | 28.21(6.08) | -0.7963 | -1.6414 | 28・33回F |
| | 木村 俊夫 | 三重 1(5) | 16.80 | 21.83 | 16.68(1.58) | 31.94(9.60) | -0.1727 | -1.0481 | |
| | 二階堂 進 | 鹿児島 3(3) | 30.00 | 25.31 | 27.14(2.62) | 29.49(4.27) | -0.6529 | -1.0613 | |
| | 小川 平二 | 長野 3(4) | 21.57 | 31.96 | 17.65(1.88) | 30.81(3.17) | -0.1164 | -0.1958 | |
| | 橋本登美三郎 | 茨城 1(4) | 14.71 | 34.32 | 20.43(2.78) | 28.63(3.53) | -0.7613 | -0.9672 | 36回F |
| | 稲葉 修 | 新潟 2(4) | 16.29 | 32.71 | 18.24(3.40) | 33.85(7.16) | -0.8038 | -1.6935 | 36回F |
| 11 | 三池 信 | 佐賀 全(5) | 17.75 | 45.77 | 15.32(1.85) | 42.80(1.97) | -0.2261 | -0.2412 | 35回F |
| | 古井 喜実 | 鳥取 全(4) | 17.80 | 29.29 | 17.91(2.78) | 30.95(2.44) | 0.1894 | 0.1662 | 33回F |
| | 瀬戸山三男 | 宮崎 2(3) | 23.22 | 15.07 | 27.09(6.18) | 26.67(12.08) | 0.1486 | 0.2906 | 35回F |
| | 小山 長規 | 宮崎 2(3) | 25.57 | 31.80 | 27.14(3.80) | 33.28(7.10) | -0.5609 | -1.0480 | 34回F |
| | 白浜 仁吉 | 長崎 2(4) | 16.28 | 39.79 | 19.13(2.59) | 32.87(6.64) | -0.8961 | -2.2925 | 28回F |
| | 足立 篤郎 | 静岡 3(4) | 18.46 | 13.70 | 21.55(4.97) | 19.74(7.26) | -0.5952 | -0.8696 | 30回F |
| | 田中 竜夫 | 山口 1(4) | 21.08 | 25.84 | 21.51(2.28) | 24.17(1.79) | -0.7659 | -0.5996 | |
| | 森山 欽司 | 栃木 1(5) | 17.00 | 15.87 | 15.59(2.40) | 19.34(4.20) | -0.4865 | -0.8508 | 28回F |
| | 山中 貞則 | 鹿児島 3(3) | 27.17 | 42.91 | 27.17(1.99) | 45.45(2.58) | -0.0698 | -0.0903 | |
| | 西村 英一 | 大分 2(3) | 22.32 | 16.74 | 24.72(3.83) | 18.02(2.70) | -0.7981 | -0.5617 | 36回F |
| 10 | 永田 亮一 | 兵庫 2(5) | 20.91 | 19.11 | 14.30(2.92) | 35.70(11.59) | -0.5314 | -2.1124 | 33・35回F |
| | 長谷川 峻 | 宮城 2(4) | 19.50 | 33.85 | 19.42(1.35) | 35.92(4.55) | -0.3062 | -1.0338 | |
| | 渡海元三郎 | 兵庫 3(3) | 23.62 | 8.52 | 27.16(7.02) | 14.49(4.20) | 0.0441 | 0.0264 | |
| | 原田 憲 | 大阪 3(4) | 27.68 | 5.82 | 19.47(4.14) | 15.45(8.68) | -0.7468 | -1.5635 | 35回F, 34回D |
| | 田村 三重 | 三重 2(4) | 32.19 | 11.71 | 29.54(4.74) | 15.58(3.57) | -0.8123 | -0.6111 | |
| | 天野 公義 | 東京 6(4) | 17.55 | 23.41 | 16.43(4.07) | 24.93(4.80) | -0.9408 | -1.1087 | 34回F, 31回D |
| 9 | 金子 岩三 | 長崎 2(4) | 16.26 | 29.46 | 20.71(2.41) | 27.22(3.09) | -0.6306 | -0.8109 | |
| | 始関 伊平 | 千葉 1(4) | 16.80 | 19.20 | 16.42(2.99) | 24.11(3.97) | 0.2172 | 0.2890 | 33回F, 34回D |
| | 斎藤 邦吉 | 福島 3(3) | 30.90 | 27.86 | 28.88(4.70) | 33.25(7.39) | -0.7287 | -1.1446 | |
| | 八田 貞義 | 福島 2(5) | 14.72 | 14.91 | 15.69(2.43) | 27.77(8.21) | 0.0560 | 0.1891 | 34回F |
| | 丹羽 兵助 | 愛知 2(4) | 24.55 | 27.62 | 20.03(3.36) | 32.76(6.41) | -0.3129 | -0.5959 | 34回F |
| | 藤田 義光 | 熊本 1(5) | 16.15 | 21.92 | 14.48(2.20) | 28.97(5.79) | -0.5770 | -1.5163 | 28・33回F |
| | 毛利 松平 | 愛媛 3(3) | 25.36 | 20.86 | 24.37(3.00) | 20.36(5.54) | -0.5652 | -1.0456 | |
| | 金丸 信 | 山梨 全(5) | 18.43 | 16.92 | 18.49(3.48) | 18.10(3.10) | -0.6665 | -0.5928 | |
| | 倉成 正 | 長崎 1(5) | 19.13 | 15.27 | 16.96(2.03) | 14.92(2.23) | 0.0230 | 0.0253 | |
| | 竹下 登 | 島根 全(5) | 22.92 | 13.45 | 19.50(2.35) | 19.08(4.54) | -0.5550 | -1.0715 | |
| 8 | 久保田円次 | 群馬 1(3) | 27.51 | 22.70 | 23.01(4.74) | 30.93(5.84) | -0.5447 | -0.6708 | 28回F |
| | 天保 光晴 | 福島 1(4) | 16.12 | 20.28 | 16.04(1.82) | 25.59(3.70) | 0.0166 | 0.0337 | 29回F |
| | 藤井 勝志 | 岡山 2(5) | 15.92 | 17.41 | 14.74(1.69) | 23.68(6.16) | -0.5064 | -1.8518 | 28回F |
| | 宇野 宗佑 | 滋賀 全(5) | 21.85 | 24.47 | 16.77(2.86) | 32.76(5.34) | -0.7353 | -1.3742 | 28回F |
| | 安倍晋太郎 | 山口 1(4) | 31.87 | 11.33 | 24.09(5.06) | 10.96(1.14) | -0.0925 | -0.0209 | 30回F |
| | 井原 岸高 | 愛媛 2(3) | 20.45 | 28.67 | 21.39(1.90) | 31.01(4.10) | -0.3458 | -0.7476 | 32・34・36回F |
| 7 | 谷川 和穂 | 広島 2(4) | 18.68 | 22.61 | 16.64(3.16) | 24.79(3.43) | -0.7115 | -0.7710 | 29・34回F |
| 6 | 木村武千代 | 香川 1(3) | 24.50 | 9.28 | 21.11(2.66) | 13.81(2.76) | -0.7501 | -0.7785 | 28・29・31回F |
| | 葉梨 信行 | 茨城 1(4) | 17.61 | 23.41 | 14.03(6.79) | 28.07(6.94) | -0.9224 | -0.9424 | 28・30回F |
| | 山村新治郎 | 千葉 2(4) | 24.01 | 21.31 | 20.04(5.55) | 25.26(4.73) | -0.6862 | -0.5843 | 34回F |
| 5 | 砂田 重民 | 兵庫 1(5) | 22.63 | 3.98 | 17.82(3.42) | 4.72(1.22) | -0.0486 | -0.0174 | 28・29・33・35回F |
| | 福家 俊一 | 香川 1(3) | 18.69 | 10.17 | 21.93(3.06) | 14.12(3.02) | -0.1034 | -0.1021 | 30・32・33・34・36回F |

当選回数をあげ、各人について、第36回総選挙の数値と、第28回から第36回までの平均値および標準偏差(SD)をあげておいた。そして、得票率とRS指数との相互関連的な推移の状況を把握できるように、相関係数、およびRS指数に対する得票率の回帰係数をつけ加えた。なお、ここでいう回帰係数とは、得票率をx軸に、RS指数をy軸にとってプロットした9つの点の回帰直線 $y=ax+b$ の傾きaのことで、 $C_{xy}/S_x^2(=r \times S_y/S_x)$ の値である(但し、 S_x 、 S_y はそれぞれx、yの標準偏差、 C_{xy} はxとyとの共分散、rは相関係数)。

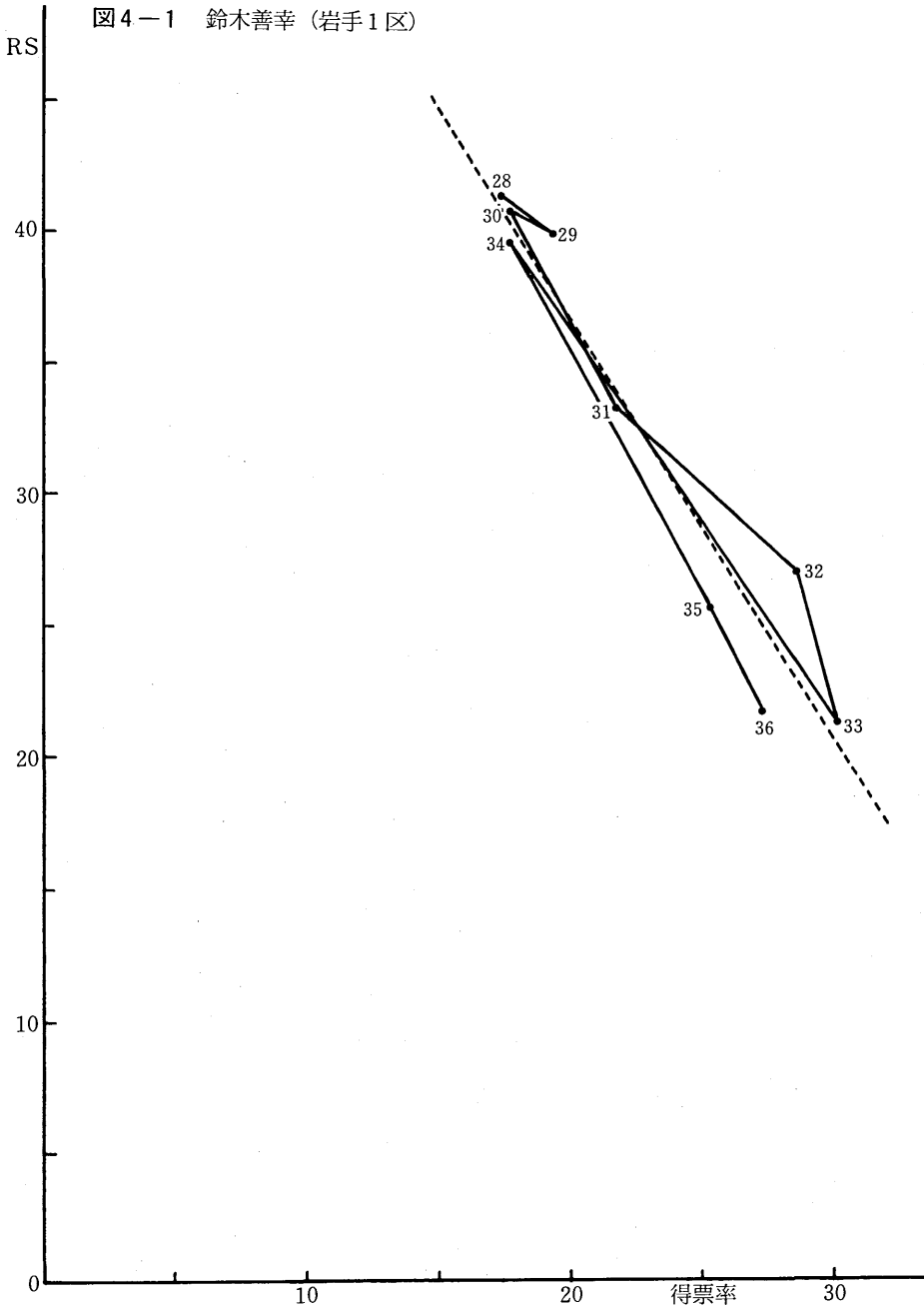
大部分の候補者には、負の相関が算出される。すなわち、得票率の上昇は、一般的にはRS指数の減少をもたらしているといえる。正の相関が算出されたのは12人であるが、そのほとんどは相関係数の値が著しく低く、また回帰係数も低いので、得票率の上昇がRS指数の上昇と結びついているとは考えられない。このような現象は、期間を短かくとった選挙の間であられることはあるが、それは、特別な事情によって地元票にかなり大きな変動が生じた場合である。

個人の集票動向を視角的にとらえるために、得票率とRS指数の相関グラフの上にプロットされた各点を選挙の時期順に直線で結び、あわせて回帰直線を書き込んでみた。これを76人について試みたもののなかから、特徴的なパターンを抽出して図4に例示した。

図4-1の鈴木善幸(岩手県1区)と図4-2の園田直(熊本県2区)は、負の相関が高く、かつRS指数の標準偏差が大きい事例である。すなわち、得票率の増大が地盤外地域への浸透にほぼ比例的に対応し、かつ9回の選挙の間で得票の地域偏重度の変動が激しい候補者である。鈴木は負の相関係数の絶対値が76人中最高(-0.9639)で、RS指数の標準偏差も10位(0.0796)であり、園田は標準偏差が5位(0.0904)で、負の相関係数の絶対値が11位(-0.7923)である。両者ともに回帰係数がほぼ-1.6で(絶対値で6・7位)、RS指数は得票率の変動に極めて敏感である。このパターンに属する候補者としては、2人のほかに、田中角栄(新潟県3区)、長谷川四郎(群馬県2区)、白浜仁吉(長崎県2区)、原田憲(大阪府3区)、斉藤邦吉(福島県3区)、稲葉修(新潟県2区)、葉梨信行(茨城県1区)などがあげられる。

ところで、図4-1と図4-2をみると、鈴木は第33回、園田は第32回に至るまで、着実に地盤外に進出して得票を伸ばしている状況があらわれている。しかし、ともに次の選挙では大きく得票率を落し、それが地盤外地域の票の喪失に起因しているために、RS指数が急上昇しているわけである。その原因を選挙結果の集計表だけから推測すれば、鈴木は第34回は自民党公認候補の1人増、園田は第33回は候補者の乱立(前回の自民4、社会1、共産1に加えて、無所属6人が立候補して計12人)に起因していると考えられる。このようなグラフ上での直線の急激な左上向き現象は、自民党が当選の時点で過半数を割った第34・35回総選挙において、多くの候補者に顕著にあらわれていることは興味深い。しかし、これらの多選議員の間では、それが落選に結びつくことは稀であり、得票率の減少はあっても、地盤票に依拠して全体としての保守退潮を一定の水準でくいとめている政権政党の強靱さがそこにみられるようである。

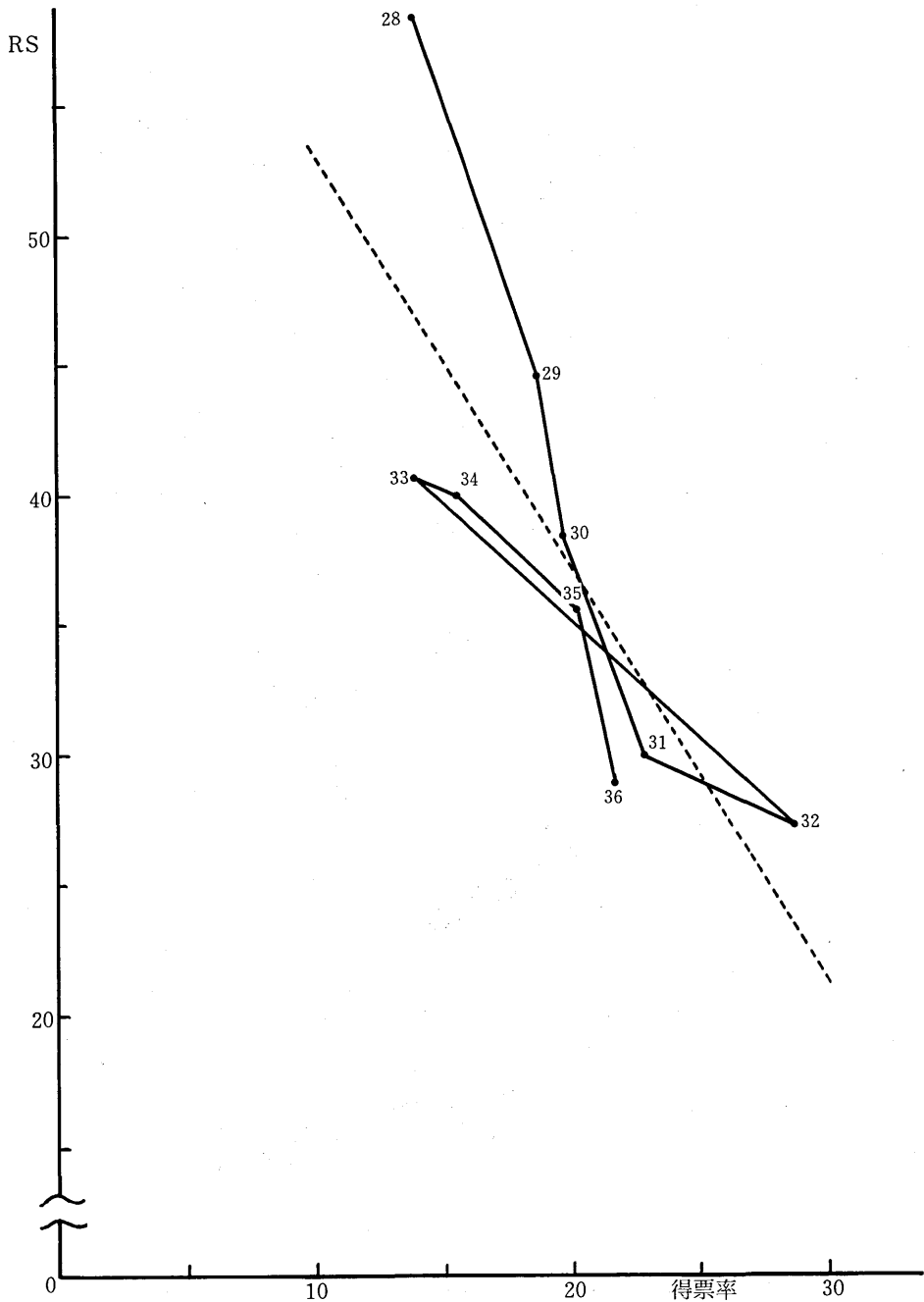
図4-3の山中貞則(鹿児島県3区)と三池信(佐賀県全区)は、RS指数の平均値が高く、かつ得票率とRS指数の標準偏差がともに小さく、相関もほとんどみられない事例である。RS指数平均値は、山中が2位、三池が4位であり、RS指数の標準偏差は山中が下から12位、三池が下から6位であり、負の相関係数の絶対値は山中が下から7位、三池が下から19位である。要するに、得票の地域偏重度が一貫して高く、その変動幅が小さいために、得票率が一定の水準を保っている限りにおいては、強力な地元票を基礎に安定して当選を続



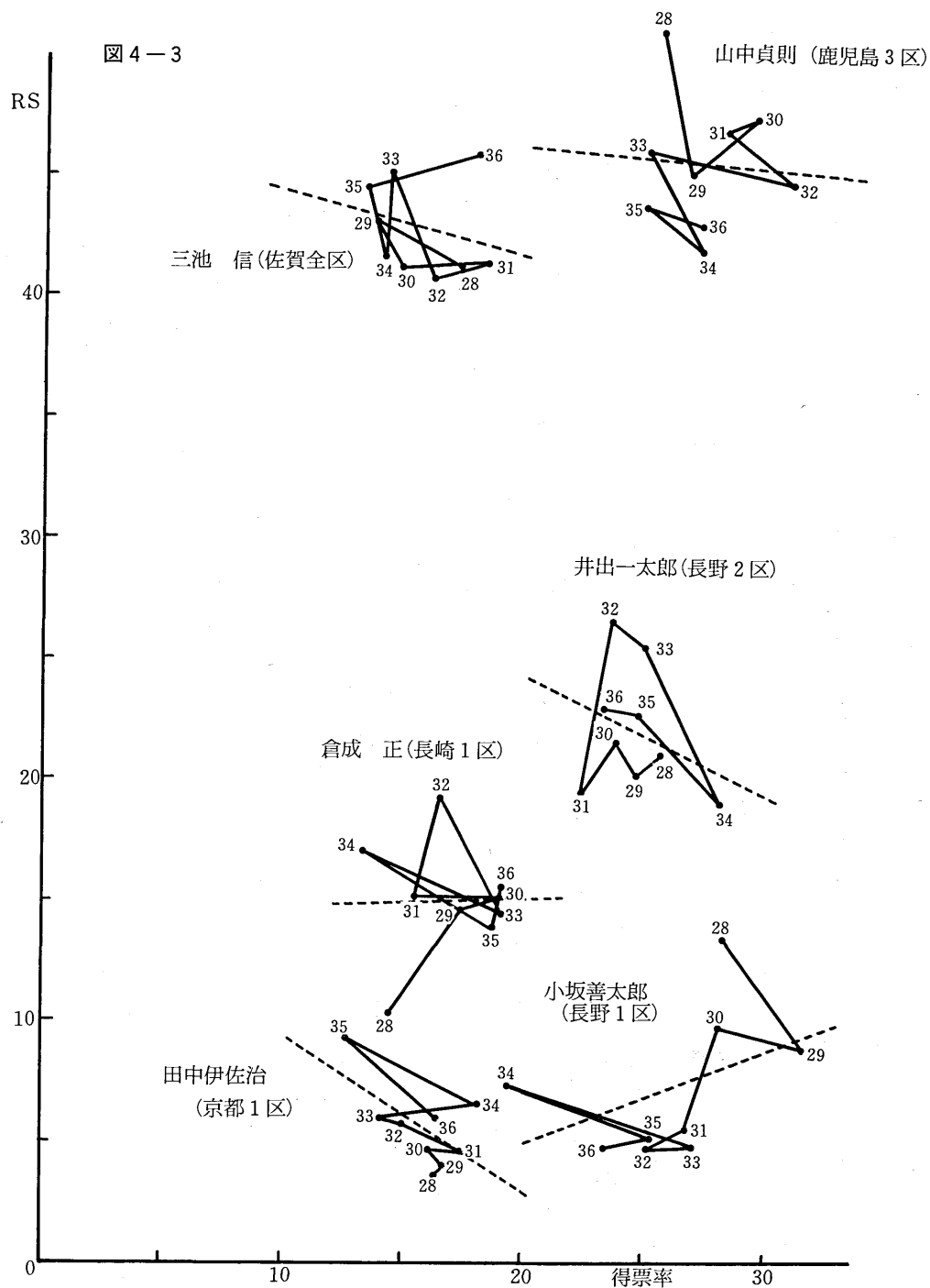
けている候補者である。図には示さなかったが、根本竜太郎（秋田県2区）、久野忠治（愛知県2区）などもこのパターンに属する。

同じ図4-3に示した井出一太郎（長野県2区）、倉成正（長崎県1区）は、RS指数が中程度でやはり変動幅が小さく、田中伊佐治（京都府1区）、小坂善太郎（長野県1区）は、RS指数が低くて同様に変動幅が小さい事例である。いずれもかなり長期にわたって集票パターンがほぼ一定している候補者だといってよい。このパターンには、RS指数が中程度（ほ

図4-2 園田 直 (熊本2区)

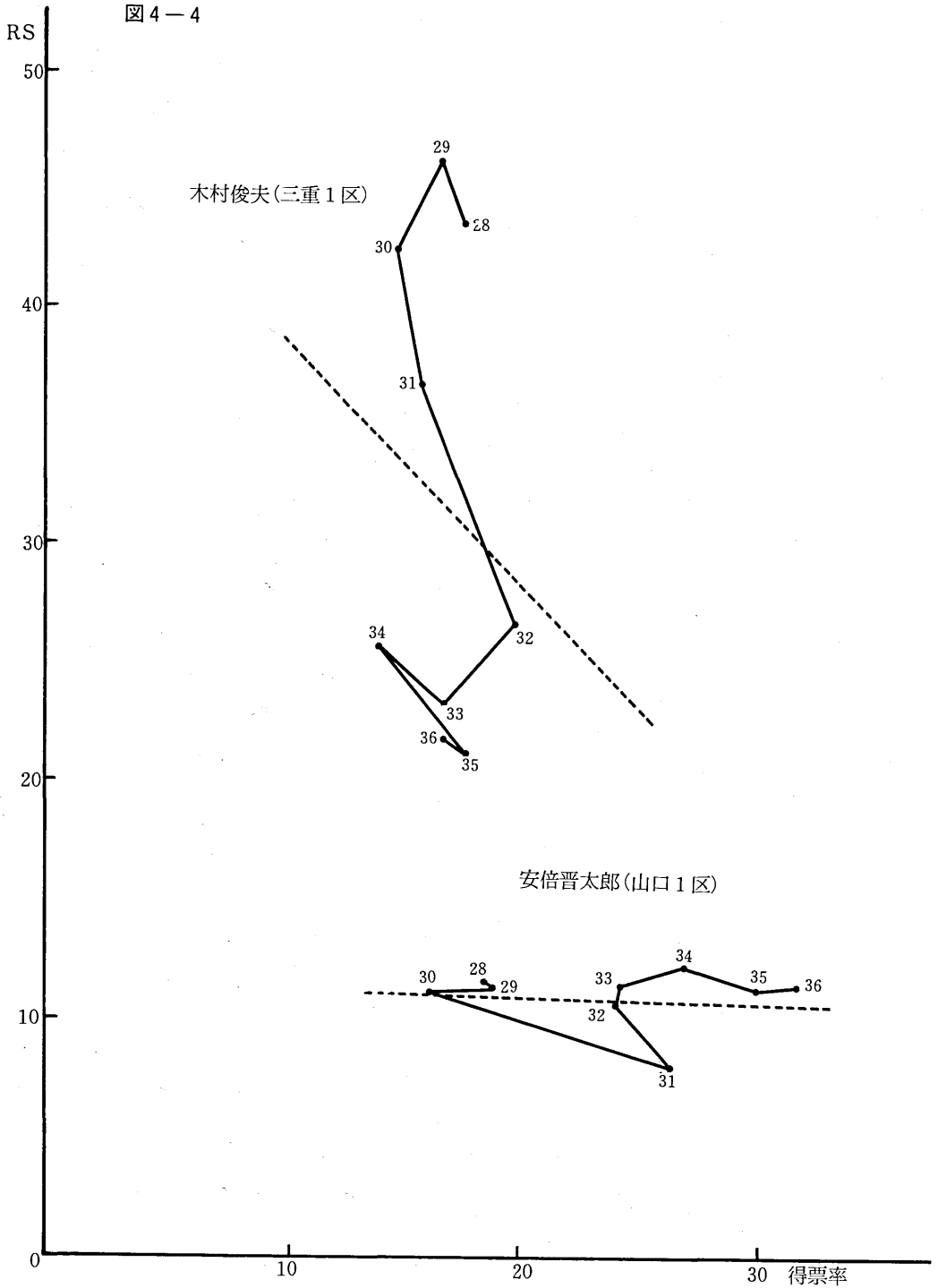


ば0.10~0.35)では、三木武夫(徳島県全区)、村上勇(大分県1区)、桜内義雄(島根県全区、但し第28回を除く)、松野頼三(熊本県1区、但し第35回の落選時を除く)、古井善実(鳥取県全区)、田中竜夫(山口県1区)、金子岩三(長崎県2区)、木村武千代・福家俊一(ともに香川県1区)らがあり、RS指数が低い(ほぼ0.15以下)のでは、山ロシズエ(東京都



1 区), 砂田重民 (兵庫県 1 区) らの大都市選挙区の候補者がある。

極めて特異な線型を描く候補者としては、図 4-4 の木村俊夫 (三重県 1 区) と、安倍晋太郎 (山口県 1 区) の例がある。木村は、得票率の変動幅が極めて小さいわりに (標準偏差 0.0158) RS 指数の変動が激しい (標準偏差 0.0960)。このような形で RS 指数が経年的に急



減していくということは、地元票の減少を地盤外地域の増票でカバーしていることになる。このパターンには、原健三郎（兵庫県2区）、八田貞義（福島県2区）、丹羽兵助（愛知県2区）らがある。当然のことながら相関係数は極めて低い。

逆に、安倍は得票率が大きく変動しているにもかかわらず(標準偏差 0.0506), RS 指数はほとんど変わっていない(標準偏差 0.0130)。得票率の変動が選挙区全域を通じてほぼ同率に起る事例であり, RS 指数は極めて低く定着している。これに近いものとしては、江崎真澄(愛知県 3 区), 福田赳夫(群馬県 3 区)らがあり, 準都市型選挙区で選挙区全域に共通の影響力をもつ候補者にみられるパターンである。

以上の各パターンのほかに、得票率, RS 指数ともに変動幅が激しく, 相関がほとんどみられない事例(瀬戸山三男, 宮崎県 2 区), 小さな変動のなかで相関係数が高い事例(坂田道太, 熊本県 2 区)なども抽出することが可能である。

このような候補者の個別的分析は、昭和 33 年以来の長期にわたる数値を対象としてきたので、変動をかなり大きくとらえることができたが、その対象を第 31 回～第 32 回頃からに限定すれば、一般にはその変動幅は極めて小さくなる。その時期は、多党化の進行と自民党の相対的得票減のなかで、自民党の候補者公認が数の上で限定・定着し始めた時期でもあり、55 年体制の終焉とともに新しい政党システムが展開し始めたことを、こうした側面からもとえることができるようである。

あ と が き

本稿は、衆議院総選挙における得票の地域的偏重を選挙区としての数値で表現することを、方法論的に提示するのが目的であった。その方法を検討するに際して、かなり多くの選挙の事例を取り扱ってきたために、その結果集計されたデータを、未整理の部分が多いとは知りながら、若干の分析を加えて掲載した。しかし、ここで試みた分析は、いずれも選挙の集計表のみを用いたものであり、その限りにおいては、説明力に限界があることはいうまでもない。今後は、選挙区の社会的特性をも計量的に把握することを考え、それらを総合して多変量的に解析することの必要性を痛感している。特に、日本独特の長期にわたる一党優位制的支配構造に選挙区レベルからアプローチしていくには、それは欠かせない作業のように思われるからである。

なお、本稿で提案した DS 指数や RS 指数の算出には、すべての選挙区における市町村ごとの候補者得票数を計算に導入しなければならなかった。専ら手許にあるポケット・コンピューターを使用した。プログラミングは、名古屋大学工学部応用物理学科学生・水崎拓が担当し、また第 28 回にまでさかのぼったデータの入力とカード作成作業は、岐阜大学工学部工業化学科学生・三石智君が加わって行なった。2 人の協力がなければ、これらの指数の有効性の試算すら困難であったことを思い、ここに感謝の意を表したい。